

おたの伝説



目次

一

序文

著者行状

上野

年久

……

二

はじめに

著者行状

上野

年久

……

本文目次

1 序文

2 序文

3 序文

4 序文

5 序文

6 序文

1909.02.42.12 7

# 目次

一	序文	.....	美郷村村長	上野喜久	.....	1
二	はじめに	.....	美郷村教育長	猪井泰孝	.....	3
						5
						7
						18
						48
						62
						93
						100

7	人物の伝説	.....	134
8	その他の伝説	.....	133
四	編集後記	.....	131
五	奥書	.....	124
1	著者略歴	.....	116
2	奥付	.....	



### 発刊のことば

美郷村村長 上野喜久

近年の急激な開発により、わが国の都市はもとより町村も激しい勢いで変貌し、将来を予測することが困難な現状となってまいりました。その中で、祖先の貴重な文化遺産が幾度となく崩壊の危機にさらされています。先人の貴重な遺産である文化財を保護し、これを後世に伝えていくことは、私たちに課せられた責務であります。

すでに、本村では昭和四十四年に「美郷村史」を發刊し、続いて「四ツ足堂」などの文化史を發刊してまいりました。しかし、私たちの村には、それらに記されていない数々の昔話が残っています。こうした故郷の文化遺産が忘れ去られることがないように、今回「美郷の伝説」を編集し、發刊することになりました。本書を今後の村づくりや郷土学習の資料として活用し、役立

ていただければ幸いと存じます。

このたびの発刊に当たり、美郷村教育会にお願いして、村内をくまなく取材し、多くの伝説を収集していただきました。また、取材の際に各方面でご協力賜りました有志の方々に対し、深甚なる感謝を申し上げます。

最後になりましたが、本書編集の全般にわたり専門的なご指導・ご協力を賜った喜多弘氏に対し、衷心より敬意と感謝を申し上げます。

本書がひとりでも多くの方に読まれ、活用されることを祈念して、発刊のご挨拶といたします。



### 発刊にあたって

美郷村教育長

猪井泰孝

本村にあるさまざまな民俗資料は、豊かな自然と歴史的風土のなかで、郷土の先人が育んできたものであり、村民にとって貴重な文化遺産であります。この文化遺産を後世に引き継ぎ、これに寄せる理解と愛護の心を培うことは現代に生きる私たちの重要な努めであります。

二十一世紀に向かって本村は、豊かな自然の中で住民が安心して生活し、更に新たな文化を創造して心豊かに暮らしていくことをめざしております。この時期に、地域の民俗資料となる、「美郷の伝説」が刊行され、花咲き実ろうとしていきます。大変うれしいことであります。

幸せなことに、本村出身の喜多弘先生に執筆から編集全般にわたるご指導とご労苦をいただき、ここに発刊するに至りました。

心から感謝を申し上げます。

この「美郷の伝説」が広く紹介され、多くの村民に親しまれ、文化の創造に資することを念願しております。

本書の発刊に際して、ご指導ご協力をいただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

## はじめに

遠いむかし、日本にまだ文字のなかった時代には、国家の重大なでき事は、語り部かたべによって語り伝えられました。文字が伝来すると、古事記や日本書紀などの歴史書に編さんされて、後世まで正確に伝えられるようになりました。これは文字や書物の功績といえるでしょう。

しかし、庶民の間では村のこと、家のことは祖父母・父母・子・孫へと、語り部のように語り継がれ、それを聞くことは楽しみの一つでした。最近山村でも教育やマスコミが普及し、交通も便利になって、日常生活も都会並みに向上したことは、よろこばしいことです。しかし、反面、山村の過疎現象は、美郷村も例外ではなくなり、消滅した部落や地域が現れはじめました。

私たちの祖先が、苦勞の末に拓いた耕地が、杉や桧の林となり、地域の人々の心より所であった祠やお堂が、祭り手のないままに、雑草や樹木の中に埋もれて、その由来や存在さえも忘れられようとしています。前に、美郷

村連合婦人会が、村内のお堂を調査研究してその成果を出版し、教育委員会が村内の古老とともに、「美郷村の年中行事」を刊行し、私も協力させて頂きました。今回、美郷村教育会が、失われようとしている村の伝説集の出版を計画されました。美郷村に生まれ育ち、村内各校で勤めたよしみで、その編集を依頼され、老齢をもちえりみず、お引き受けしました。村内を回って伝説採集をしましたが、その多くは老人方からで、若い方で関心のある方からも、聞かせてもらって、八十余編を採集し、刊行のはこびとなりました。その中に平家伝説の多いのに驚きました。山姥や天狗など妖怪談の多かったのも、地域性によるものでしょう。四国霊場に近いわりに、お大師伝説にめぐり合えなかったのは意外でした。

短期間に編集の小著が、村の文化向上に役立てば幸せと存じます。

## 1 平家伝説

### ① 刀研ぎ場

屋島の合戦に負けた平家は、梨の峠から柳の水へ出て、一本杉の下の剣山の一の鳥居をすぎ、初めて水のある谷あいへ出ました。そして代わる代わるその水を飲んで、ホッと一息つきました。

高さ十四、五メートルほどの崖の上から、こけの生えた岩の間をしたり落ちる水で、元氣を取りもどした侍たちは「ここまで来れば源氏の軍勢も、もう追っては来まい。」と安心して、腹ごしらえをした後一休みして、通ってきた山道のけわしさや、戦争の思い出話、都での華やかだったくらしなどの話に花を咲かせました。そして万一の追手に備えて、めいめい刀を研ぎはじめました。きれいな水つまりはたちまち赤茶色のさび色になり



ました。いよいよ出発することになって、めいめいが、「この水を飲む者は、末代まで腹がくわって（痛んで）死んでしまえ。」とのろいの言葉をかけて、またけわしい山道を越えて、木屋平へと向かいました。それからここを「平家の刀研ぎ場」というようになりました。

このあたりでただ一か所しかないおいしい清水も、平家ののろいでその後は毒水となって、山の木こりや、剣山参りの行者たちが、この水を飲んで腹痛をおこして苦しんだ上、死んだ人が相継ぎました。人々はこのろいの恐ろしさを語り継いで、今でも刀を研いだ所から下の水は、一切飲まないそうです。

## ② 退きが窪

刀研ぎ場から西へ四、五百メートルの間の右手は、屏風を立てたような断崖絶壁です。ずつと古いむかし、大きな山津波で山はだが崩れ落ちたのだといっています。剣山の参道はその崖の上を三〇センチメートルほどのせまい道が通っていますが、木の枝や草の根をつかまないと、こわくて通れません。そ

こを抜けるとちようと月野の在所の上に出ます。ここは峰に近い山の上ではめずらしく、一ヘクタールほどの平地になっています。

平家を追ってきた源氏の侍たちは、ここで一休みして、前方にそびえる陣が丸の山を仰いで、こんなけわしい山道を追いかけて、平家の待ち伏せにでもあったら勝ちめはないと、ここで作戦会議をして、もう追うのは止めて退きあげることになりました。それでこの平地を「退きが窪」というようになったそうです。



退きが窪

## ③ 平家さんのお墓

県道「川島二の宮線」から分れて、丸山の方へ少し上った道の上に、三方をけわしい崖に囲まれた小山があります。杉の原木におおわれたその先の一段高い所に、板碑が十基立っていて、村の人は「平家さんのお墓」と呼んでいます。



屋島の合戦に敗れた平家の一隊は、柳の水から木屋平へにげる途中、本隊におくられて道に迷い、刀研ぎ場の方で源氏の兵士に見つかり、ここまで逃げてきて、このけわしい崖の上で全員が自害した、といわれています。十基のお墓はみんな板碑で、上が三角に尖り、その下に二つの横線を彫り、さらに下を四角の線で囲んだ中に、中央に阿弥陀如来（キリク）、右下に観世音菩薩（サ）、左下に勢至菩薩（サク）の三尊の梵字が刻まれています。まん中の一段大きい墓の三尊には蓮華の花と、花瓶が彫つてあるので、たぶん大将のお墓と思われれます。



平家さんの墓

ここまで上げてきて、自害した平家の侍たちを気の毒に思った村の人々がここに葬つてお墓を建てたのでしよう。近くの丸山には、その時侍たちが乗つてきたという、馬の墓も五基あつて、今でも両方の墓へ、毎年正月には鏡餅と串柿を、春秋の彼岸とお盆にはしきみをお供えています。

東山でも一番奥の在所で、むかしは道も悪かったので、急病人、とくに齒

痛で苦しんだ時など、この平家さんのお墓にお参りしてお願いすると、ふしぎによくなったといわれています。また牛や馬が病気になる時、馬の墓にお願いすると、これもすぐ元気になるといわれています。

#### ④ 土俵が窪

一本杉の下の刀研ぎ場から、スキー場のあつた陣が丸へ出て、さらに権現のたおへと、峰伝いに木屋平へ向つて落ちていった平家の落武者たちは、中村の槇山の上の土俵が窪という広い平地に出ました。「ここまで来れば一安心だ。」と休けいして、後から来る人たちと待ちあわせることになりました。

そのうちに侍たちは、だれからともなく相撲を取りはじめました。幼い天皇も力のこもった侍たちの取り組みに、手を打つてよろこばれ、久し振りに平和なときを楽しみました。



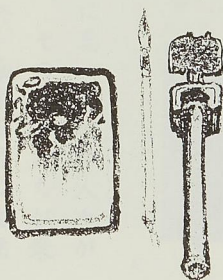
やがて後れてきた人たちと合流してさらに山深い木屋平をさして、落ちて行きました。それからこの窪地を、土俵が窪というようになりました。

⑤ 硯の水と矢壺の水

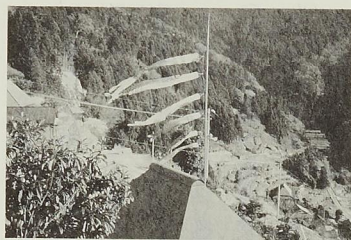
中村の東横山の上、剣山への参道沿いに、清水のわき出る所が二か所あって、一つを硯の水、他の一つを矢壺（矢立）の水と呼んでいます。

むかし平家の落武者が、陣が丸から土俵が窪を通って木屋平へ向う途中、この水でのどをうるおし、硯や矢立（むかしの筆記用具）に水を受けて、これまでの出来ごとを記録したといえます。

この泉は二つとも、山の頂上近くにあって、どこから流れ出るのかわかりませんが、むかしからどんな大日照りにも、水が涸れたこともなく、またどんなに大雨が降っても、濁ったこともありません。また水かさがふえることもありません。ただ一日のうちで潮



の満ち干に合わせ、規則正しく水の量がふえたりへつたりするそうです。明治から大正時代にかけて、冬の寒い季節に里分からここへ大豆を運び上げて、この水と付近の雑木を使って高野豆腐を製造していました。今はこの道を通る人もほとんどなくなったので、二つの泉はどうなっているのでしょうか。



⑥ 平家の落人部落

宮倉谷の中流、中古井部落は、平家の落人おちうとによって拓かれたといわれています。

いい伝えによると八百年ほどむかし、屋島の戦に敗れた平家の大将、平国盛は、陣が丸から峰伝いに、木屋平へ向ったといわれています。平家の一族、藤村某に率いられた一隊は、権現のおから本隊に分れて、宮倉谷に沿って下りました。そしてけわしい絶壁が兩岸からせま

る要害の地に落ち付き、そこを開拓して住みついたのだそうです。

中古井部落は今こそ国道一九三号線が、在所の中央を通って車の往来も多いが、むかしは手を立てたような山はだに、二十戸ほどの人家が急傾斜の畑を耕して、生活していました。二十戸のうち別の姓が二、三戸ありますが、それも元は藤村姓で、部落全体が藤村一族だったそうです。

本家筋の藤村家には、先祖から伝わったという、弓とやなぎい（矢筒）と弦巻が今も大切に保存されています。案内してもらった地区の共同墓地には、先祖の墓という二基の板碑が、おかまごの中に祭られています。そして、そのそばに三十五基の板碑が一行にならんでいます。これは主人を守ってここに住みついた一族や、家来筋の墓だといわれています。

### ⑦ 三十釜床かまとこ

屋島の戦に敗れた平家の一隊は、清水越えをして、曾江谷にそって南に下り、吉野川を渡って高越山のふもとを通って、宮んたおの八幡さんに近い平

地で一休みして、ここで昼食を取ることになりました。侍たちは薪を集める者、米を洗うもの、陣中で使う小さな鍋に入れる山菜を集める者、手ごろな石をコの字形に組んで、急ごしらえのおくどさんを築く者などそれぞれに分かれて、昼食の用意をしました。この時、石を集めて作った三十余りのかまどの跡は、今でも道端の平地にそのまま残っていて、三十釜床と呼ばれています。



### ⑧ ふじ山の笠石と冠石

中村小学校の校庭から、別枝谷を隔てて西北にあたる所にふじ山といって富士山によく似た形のよい山があります。その山の頂上付近の崖の上に、「笠石」といって、ちようどかぶり笠の形をした、直径三メートルほどの大岩がせり出しています。

源平のむかし、屋島の戦に敗れた平家の落武者たちが、高越山のふもとを



通って、この近くの三十釜床で昼飯を作って食事をした後、かわるがわるこの石の上に乗って、目の下の深い谷底をのぞき、さらに対岸の手を立てたような急な坂道の上にある燧峠をながめて、これから進む道をたしかめた後、急な坂道を下り、谷水でのどをうるおし、こんどはけわしい坂を登って燧峠を越えて、安徳天皇や仲間のいる、木屋平へ越えていきました。

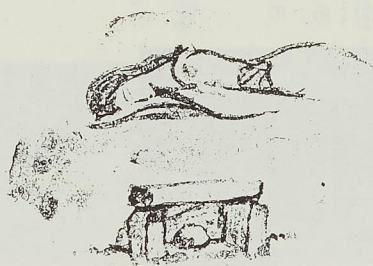
今でも村の人は笠の形をしたこの岩を、「平家の笠石」と呼んでいます。

またこの笠石の近くに「冠掛の石」といって、高さ二メートルほどの石が立っています。平家の大将が冠を取ってこの石の上に置き、食事をしたり休けいたので、こういうのだそうです。

### ⑨ 京女郎さん

中村小学校から燧峠へ登る坂道の途中に、平らな青石でまわりを囲んだ「おかまご」があつて、その中に小さな石が祭つてあります。村の人はこれを「京女郎さん」と呼んでいます。

むかし屋島の戦に敗れて、木屋平から祖谷の方へ落ちのびた平家の侍の後を追つて、はるばる京の都から、後を追つてきた「白拍子」という遊女が、苦勞の末やっとここまでたどりつき、この坂で力尽きて亡くなったのだそうです。あわれに思った村の人たちはここに葬つて、供養してあげました。今は峠へ出る道もなくなった杉林の中に、京女郎さんのお墓だけが、たずねる人も、お祭りする人もなくさびしく残っています。



## 2 社寺の伝説

### ① 種野のお稲荷さん

種野のお稲荷さんは、美郷村と木屋平村を合わせた、種野山荘の総氏神様で、むかしから農業や養蚕、商売繁昌の神様として、尊敬されてきました。

この神様はずっと大むかし、樫の葉に乗って川向うの大石の上に、天降って来られたそうです。それでそのあたりを「樫の葉」といい、神様が降りられた石を「影向石」と呼んでいました。影向石というのは、神様や仏様が天上から降られた石をいうのだそうです。

付近の年よりの話では、明治のころまでは、お稲荷さんの川むこうに、樫の葉という所があったそうですが、今はどのあたりか、影向石がどれかわかりません。またいづごろ川の東にお宮が建てられたかもわかりません。ただ



種野稲荷神社

お宮の古い棟札には「天永三歳□□祈願所 十山中」と書いてあります。天永三年は平安時代の中頃（一一一二）で、約九百年前。十山中の「十山」は、麻植山分のことで、今の美郷村と木屋平村全体と山川町の一部で、種野山・榊山・東山・下別司・上別司・中村山・三ツ木山・川井山・大浦山・川田山の十山で、九百年前すでに十山の総氏神様であったことがわかります。だから神様が天下られたのは、それより古いむかしのことでしよう。

### (1) お稲荷さんの四方至の石

種野のお稲荷さんには、四方至の石があつて、その石は神社を中心におよそ四丁（一丁は約一二〇メートル）の、次の所に建てられていた、といわれています。

南東 榎の木の東方四ツ辻（現存）

南西 大畑の西、川田への旧道の少し上（現存）

北東 種野八幡神社の上方、一本松さんの祠の前



稲荷神社の森

北西 宮田にあった古い祠の付近

このいい伝えによると、種野の在所が全部その境の内に入ることになりま  
す。むかしから、「お稲荷さんの四方詰の石の範囲内には、雷は落ちん。」と  
いわれています。むかし、お稲荷さんのお森の大木に、稲光とともに大きな  
音をたてて、雷さんが落ちてきました。お稲荷さんは雷を大木にしばらく付け  
たところ、雷は「お稲荷さんの境内へは今後一切落ちません。」と約束して、  
天上へ帰してもらいました。それから種野の在所へは、一度も落ちたこと  
はないそうです。

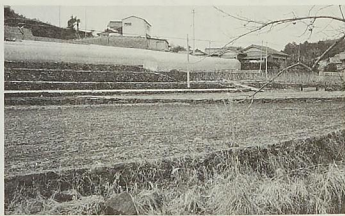
それで子どもたちは、雷がはげしく鳴る時には「お稲荷さんの氏子、お稲  
荷さんの氏子。」と大声で唱えたものでした。

四方至は四至ともいって、自分の屋敷や領地の四方の境のことで、その境  
に建てた石が、四方至の石です。延喜式という古いきまりを書いた本には、  
大社は九丁四方、小社は四丁四方と書いてあります。山崎の忌部神社には、  
四方至の立て石が残っています。

(2) 長宗我部に焼かれたお稲荷さん

種野のお稲荷さんは、種野山荘(今の美郷・木屋平村)  
の総氏神で、天永三年(一一一三)の棟札が今も残って  
います。むかしの社殿は七間(一間は一、ハメートル)  
四方もの、すばらしいりっぱな建物であった、といわれ  
ています。ところが天正十年(一五八二)のころ、土佐  
の長宗我部軍によって焼かれてしまって、その後長い間、  
一間四方の小さな社殿のままでした。今のお宮は大正の  
初年に建てたものです。

土佐の兵士はその時近くにあった浄蓮寺や神宮寺も、焼き払いましたが、  
その後、お寺は再建されずじまいで、今は伝説だけしか残っていません。



稲荷神社の舞楽田

(3) 稲荷免と種穂

種野峠の近くのさこあいの田んぼを、稲荷免といい、宮田ともいいます。

稲荷免というのは、種野のお稲荷さんにお供えするお米を作るための田んぼで、税金を免除するという意味です。そしてお宮の田んぼだから、宮田というようになったのだそうです。

ここでとれた稲穂は、毎年旧暦の九月十二日に刈り取って、白木の棒で担いで持ち帰り、しまっておいて、よく年二月の初午に神社の庭で、参詣した人々にうばい取らせました。これを「種穂の神事」といいました。この種をまいた稲には虫もつかず、病気にもかからないでよく実るので、大ぜいの人々が争って、うばいあつたそうです。

蜂須賀さんが殿様になってからは、今の美郷村の大部分は、稲田さんの領地になって、宮田の稲荷免は取り上げて税をかけ、代わりにお稲荷さんの登り口の田んぼを、新たに稲荷免にしました。そして前とおなじように九月十二日に刈り取って、社殿にしまっておき、初午の日には混雑しないように、参拝者に二穂づつ紙に包んで授けました。



稲荷免の田んぼ

稲田さんが田んぼを交換してから、四百年ほどになりますが、今でも元の田んぼを稲荷免といい、そのあたりを宮田と呼んでいます。



稲荷神社の仮家

(4) 仮屋と舞楽田

種野のお稲荷さんへの参道の登り口から、北へ三百メートルほどの所に、谷を隔てて仮屋と舞楽田という地名が残っています。

このお稲荷さんは、美郷・木屋平を含めた麻植山十分村の総氏神だったので、その祭日の二月の初午には、大勢の参拝者がせまい道にあふれ、参道の両側には苗木屋・種物屋・農具や日用品を売る店・飲食店・おもちゃ屋・みやげ物屋などが軒をつらねて、たいへんなにぎわいだ

つたそうです。

それでこの地方の領主であった稲田家では、臨時に役人を出張させて、混

乱が起らないように、警戒させました。その役人の宿泊所があった所を、飯屋と呼んだのだそうです。

またその西側谷を隔てた旧道沿いの、広い田んぼを「舞楽田」といいます。神社はせまくて急な坂道を登った丘の上にあり、右側は谷に向って急な崖なので、社前での混雑をさけて、道ぶちの広い田んぼに受付の家を建てて、神様に舞楽を奉納したり、参拝者のお神樂を受け付けたのでしよう。当時の建物は無くなりましたが、舞楽田という名前だけは残っています。

(5) お稻荷さんの雨乞い

お稻荷さんの北側、城が丸城との間の小谷は、北の山崎境の山から流れ出て、上流を坪井谷、取り首のあたりから下流を日開谷とあって、お稻荷さんの登り口で、種野谷に合流します。この谷は小さい割りに二つもの名前があります。

このあたりで夏、日照りが続いて、雨乞いをする時には、神様にお供えす

る道具を、日開谷の水にとっぷりつけて、ていねいに洗ってから使います。そして坪井谷の水で墨をすって、ご祈禱文を書いてお祈りすると、ふしぎに坪井谷一帯から雨雲がわき上がって、やがて大雨になって、人も作物も生き返ってほっとします。

また日開谷は、むかしはほとんどふけの田でしたから、たくさん蛙がいましたが、田植えの時も、田の草取りの時も、一切人の血は吸いません。これはお稻荷さんが「百姓の血を吸ってはならん」と、とめてあるからだそうです。



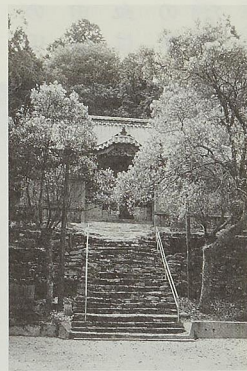
日開谷

② 広幡八幡神社の由来

東山の栗の木に祭られている広幡八幡神社は、暮石神社を下の宮というのに対し、上の宮ともいいます。ずっと大むかし、月野にいた忌部氏の一族、



今鞍進士いまくらしのしんしという人が、古土地に移り住んで、近くの栗の木の清流のほとりに九州の宇佐八幡宮の分霊をお迎えし、自分の先祖である阿波忌部の神様の天日鷲命あまのひわしのみことも併せてお祭りして、広幡八幡宮と名付け、東山村の総氏神にしたのだそうです。だから、村内でも古い神社の一つに数えられていて、今でも上谷を除いた古土地から東の各地区の氏神様としてお祭りしています。



東山広幡八幡神社

### ③ 山王の新田神社

戦国時代、東山の恵美子には、芝高という豪族が住んでいました。ある年の戦争に一族を引きつれて、出征することになり、川の南の柿谷へ入る急な

坂道の、大木の下に祭られている軍いくさの神様、新田神社にお参りして、

「この度の戦に勝ちますようにお守り下さい。もし無事凱旋がいせんできましたら、山王の上の広い所に、りっぱなお社を建ててお祭りします。」

と行って出征しました。戦場では鎧よろい兜かぶとに身を固め、白い馬に乗った老武士が、どこからともなく現れて、手招きするので、その方へ行くといつも勝ち戦で、大手柄を立てて、皆が凱旋することができました。それで山王の山の上うへに、りっぱなお社を建てて、新田の新田神社をいねいにお祭りしました。今でも芝高家には、三か月の前立ちのついた兜や鎧が残っているそうです。

子孫の者も言い継ぎ語り継いで、「ジンタハン」といって、ていねいにお祭りしていました。ジンタハンには仁田様じんたということ、仁じんは新しんと音がにているので、まちがったのでしよう。もともとは新田義宗と脇屋義治をお祭りして、新田大明神といていたそうです。

県内では剣山を中心にした山分に、新田神社が七十余社もあって、八幡神社と熊野神社について、三番目に多い神社だそうです。恵美子は戸数二十戸ほどの小さな在所ですが、そこに新田神社が二社も祭られていたのは、神様

のご加護に、深く感謝したからでしょう。その後長い間  
恵美子の在所だけでお祭りしていましたが、大正の初め  
政府から神社合併をするように強いわれたので、新田  
神社は二社共に近くの暮石八幡神社に合社してお祭りし  
ています。



山王の新田神社跡

#### ④ 西槇山の古城明神

西槇山の在所の上、剣山への参道に沿って、古城明神のほこらがあります。  
この神様は名前のとおり、むかしこのあたりにお城があつて、広い境内には  
馬場や射場いばという所があり、相撲や弓のけいこ、馬術の練習も行なわれ、三  
月のお節句のころには、カク撃うちという射撃大会も行なわれていました。ま



たほこらの近くには、凝ぎょうかいがん灰岩で作つた古い大きな五輪  
塔があつて、城主のお墓だといわれています。

射場は弓の練習をする所で、前方の的のあつたと思わ  
れるあたりには、矢竹やたけといつて節が低く、節と節の間の  
長い、女竹の藪やぶがあります。弓で射た矢が土にささつて  
根を下し、「矢竹の藪」になつた、といわれています。そ  
の外馬場の前方には、「鞍掛くらかけの石」という大きな石が立  
つていて、城主が馬術のけいこをして、休けいした時、  
馬の鞍を乗せたとも、平家の大將が木屋平へにげる途中  
馬の鞍をかけて休んだともいわれていますが、「この石の上に上ると腹痛をお  
こす」というので、今でも上る人はいないそうです。

この神様はまた「雨乞いの神様」として有名です。むかしは何か月もの間、  
一粒の雨も降らないことがよくありました。傾斜の急な山の村では谷水が干  
上つて、飲み水にもこまり、作物が枯れてしまうことがよくありました。む  
かしは作物がとれなくて、食べ物がなくなつても、外国米を輸入することは

もちろん、となりの県で余っている食料さえ、買うことはできなくて、野原のまんじゅしゃげや、つぶろの球根も食いつくして、お金を枕にしておえ死にした、という話もあるほどでした。それで百姓たちは必死で、神様や仏様に雨乞いをしたものです。

このあたりでも村の人が古城明神におこもりして、夜昼なしに雨をお祈りし、女子供も、みの笠姿でお弁当やお茶を運びました。洗濯物などはこっそり人目に付かない所に干します。こうすると、ふしぎに雨が降ったそうです。それでも雨が降らないことが、たまにはありました。そんな時は村の人が総出で、下の神戸谷くまべだの淵へ行つて、その水をかえ干します。そうするとどんな日照りでも必ず雨が降りました。ところがまだそれでも雨が降らなかったの  
で、気の立っている百姓は怒って、下肥を淵に流しこんだところ、たちまち  
大さだち(夕立)になって、たくさんたの畑や家や山まで、流されたこともあつた、ということです。

⑤ 流れ着いた神様・仏様

(1) 大鹿の春日神社

川島のＪＲ学駅の南のニッ森にある春日神社は、もとは東山の東の端の、大鹿で祭られていました。



川島町学の春日神社

「大鹿という名も、春日神社と関係があるのだ。」という人もあります。ところがある年の大雨で山崩れがあつて、お宮は押し流されて吉野川に出て、ニッ森の下の児島村に流れ着きました。付近の人々は「神様がお出で下さった。」とたいそうよろこんで、見晴らしのよいニッ森の丘の上に、りっぱなご殿を建ててお祭りしました。そしてさがしにきた大鹿の人々とも相談して、ここで一しよにお祭りすることにして、十月二十五日の秋祭りには、大鹿の人々も参列し、祭のよく日には学の氏子総代が羽織はおり・袴はかまで、お供えした鏡餅をもって大鹿のもとの社殿にお供えし、祭に参列してくれたお礼をいつて帰りました。この習慣は最近までずっと続いていましたが、今は過疎のため大鹿には人がいなくなったので、東山へは行かなくなったそうです。

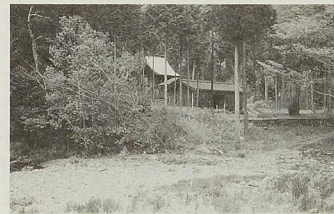
(2) 暮石八幡神社

東山の恵美子の川ぶちで祭られている暮石神社は、もとは上流の上谷で祭られていました。上谷のどのあたりかはつきりしませんが、大野と鉾山への分かれ道のあたりを、古森ふるもりというので、たぶんここで祭られていたのだらうと、いわれています。

ところがある年の大水で、社殿は流されて、今のところよりまだ下流へ流れ着きました。恵美子や湯下や土用地の人々は、

「神様はここがお気に召したので、お移り下さった。」

といって大そうよろこんで、そこでお祭りすることにしましたが、上谷の人々が神様をたずねてきて、みんなて担いで帰ることにしました。ところが今の所へ来て川ぶちの泉のある所で一休みして、さて帰ろうとすると、小さな御殿が重くて動かなくなりました。そうこうするうちに日も暮れかけたので見送りに来た恵美子や湯下の人とも相談して、今の所の五、六〇〇平方メー



流れてきた暮石八幡神社

トルを神社の境内として、もとの上谷の人々と共同でりっぱな社殿を建ててお祭りすることになったのだそうです。そして上流の広幡八幡様を上の宮といい、この神様は下流にあるので、下の宮と呼ぶようになったということです。

(3) 中古井のお地藏さん

別枝の宮倉谷に沿って、一キロメートルほど登った中古井の谷ぶちに、一間四方の小さな地藏堂があります。

このお堂はもと上流の「倉羅くららの中の瀬」という所にありましたが、いつのころか大水に流されて、今の所に流れ着きました。中古井の人々はさつそくそこにお堂を建てて、倉羅の人といっしょに、おまつりすることにしました。ところがこのお地藏さんは何がお気に召さないのか、お堂の中に納まっていないで、ひとりでに外に出て、庭の椿の木の下にすわっていました。

在所の人がお堂の中に納めても、またいつの間にか外に出ています。そん

なことが三、四度も重なるので、村の人が、「お地藏はん、お堂がこまい（小さい）けん、どくれて（すねて）、外へ出て、木の下へすわるんてか。」  
といました。ところがある夜、村の人の夢枕にお地藏さんが現れて、

「わたしはお堂の中に納まっていないで、外に出て村の人と顔を合わせて、苦しみやなやみごとを聞いて救ってあげるのが、地藏のつとめなので、外へ出るんだよ。」

とお告げがありました。それで人々はまた相談して、平らな青石で囲んだ「おかまご」を、椿の木の下に作っておまつりしました。それから地藏さんが出歩くこともなくなりました。そして在所の人が色々の苦しみやなやみごとを、お地藏さんにおねがいすると、ふしぎにうまく治まります。特に歯痛でこまっている人は、お願いすると、もう帰りには治っているの、方々から聞き伝えて、お参りに来るようになりました。そして今でもていねいに、おまつりしているということです。



中古井の地藏さん

#### ⑥ 西条の観音さん

中村の西条地区は美郷村の南西の端で、奥野々山やボロボロ滝にも近く、高い所にあつてしかも北向きなので、冬中雪の消えない在所です。むかしは二、三十軒もあつた人家も、今は数戸だけ残っていません。

西条の在所から、百メートル余りも急な坂を登った竹やぶの中に、観音堂があります。むかしは川田方面から、剣山参りの人々がここを通つてお堂で一休みして、燈峠を越えたそうですが、今ではその道もわからなくなっています。土地の人の話では、このお堂に祭られている観音さんについて、次のようないい伝えがあるそうです。

むかし南海の海を渡つて、神山の高根こうねの山へ来られたお観音さんが、さらに山を越えて高越山へ行く途中このあたりの景色がよいのがお気に召して、このお堂の前の桑畑に、お降りくだになりました。村の人はたいそうありがたく思つて、ここにお堂を建ててお祭りしました。



そして観音様がお降りになった畑は、「もったいない。」といって、今でも下肥しもどえなどは一切やりません。小便をしても腹痛をおこす、といわれています。この観音様は大そう靈驗あらたかたで、日照りが続いた時お願いすると、必ず雨を降らせてくれるので、「雨乞観音」といわれています。また物がなくなつて、いくらさがしても見つからない時、お頼みすると、じきに見付け出してくれるそうです。

何分在所から離れていて、急な坂道を登らねばならないので、「下の在所へお移り下さるように。」とお願いしたところ、「西条の人々を守るのには、この高い所がええ。それにここは見晴らしもええ。」というお告げがあつたので、そのまま今の所でお祭りしているのだそうです。

### ⑦ 中筋のお不動さん

中村の八幡さんから、少し坂を登つた道ぶちに、お不動さんを祭つたお堂があります。むかしはかやぶき、寄せ棟の大きな建物で、大泉院という山伏

さんのすまいだったそうです。今から百八十年ほど前の文化八年に、この大泉院が六十六部の法華経を写して、日本六十六か国に一部ずつ納めて、無事村へ帰りました。そのお祝いに建てた廻国碑かいこくひには、中村中の人々の名前が彫つてあります。その外たくさんの石碑が、境内いっぱい建っています。

ところがどういふわけか、このお堂には、おへんどはんもこわがつて泊りません。ある時、中枝の郵便局の郵便さんが、二戸や今丸方面へ配達しての帰り、日が暮れたので、ここで一休みしているうちに、つい眠ってしまいました。ところが夜中ごろ、白装束しろしょうそくで、笈おいざるを背負つたこわい顔の山伏が、大勢錫杖しゃくじょうを鳴らしながら出てきたので、びっくりしてにげだした、ということもあります。

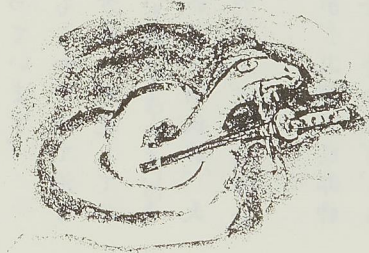
またずつとむかしのことですが、三ツ木の三木家の主人が、山崎の忌部神社に用があつて、家に伝わる宝刀をさして出かけ、帰りに余り暑いので、このお堂で一休みするうちに眠ってしまいました。気がつくとき夕方うす暗くなつていましたので、「これは大変だ、あかいうちに燈が窪の峠を越えにや。」と大急ぎで山を登り、峠近くまで来て、ふと刀を忘れたことに気がついて、

「武士が刀を忘れるとははずかしいことだ。」と、また二キロメートルほどの坂道をかけ下りました。すると下から一人の男が色まっさおにして、ふうふういいながら駆け上ってきます。「どしたんなら。」と聞くと、「いやあ、この下のお堂に白い蛇が、どぐろ巻いてギラギラ光る目で私をにらんどるんで、おとろしいのなんの、おぶけかやっつけてきたんでは。」と答えました。二人でお堂へ来てみると白い蛇はいなくて、刀がもとのままにありました。

三木家ではこの刀を「白蛇丸」と名付けて、家の宝にして大切にしまっていました。昭和二十年ごろ進駐軍が来て、持って帰ってしまったそうです。

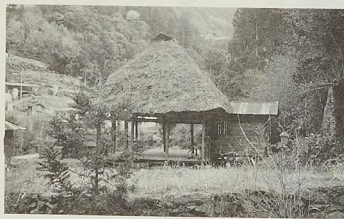
### ⑧ 飛驒の工が一夜建立の谷の堂

別枝の閑定の川向こうに、本尊のお地藏さんの外に、お薬師さんと弘法大師をおまつりした大きなかや葺きのお堂があります。境内には古い板碑や五



輪塔などもたくさんあって、お堂とともに、村の文化財に指定されています。このお堂の歴史は古い分古くて、昭和二十八年、おへんどの火火で全焼するまで、大同四年（八〇九）の棟札が残っていました。このお堂には次のような伝説があります。

むかしむかし、木屋平小学校の上の方に、とほうもない大きな杉の木がありました。台風のためにたおれたので、その木を使って木屋平小学校の隣の竜光寺の境内に、大御堂というお寺のような、大きなお堂を建て、残った材木を二キロメートルほど川下の、八幡に阿弥陀堂という、これもお寺ほどの大きなお堂を建てました。そしてまだ残った材木を、はるばる燧峠を越えてここまで運び、飛驒の工という名人の宮大工が、一夜建立といって、一晚のうちに切り組をして建てあげました。村の人々はその建物の美しさと、仕事の速さに手をたたいて、ほめそやしたということです。



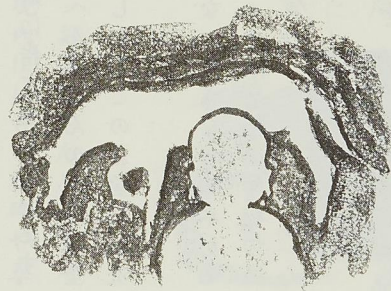
大神の谷の堂

⑨ 来見坂のお地藏さん

東山の陣が丸の下の方に、二〇〇平方メートルほどの平地があつて、古土地の円住寺の寺跡だそうですが、今はお地藏さんを祭つたお堂があつて、木屋の浦と来見坂の二つの地区で、お祭りしていました。

このお地藏さんは、たいへん靈驗あらたかで、願いごとをすると、すぐに聞いてくれますが、特に歯痛や子どもの夜泣き、安産の祈願などに、ご利益があるといわれていました。そのためでしょうか。お盆の十四日、十五日、二十四日とつづけて三回も廻り踊りがあつて、夜おそくまで、にぎやかに踊つたそうです。

ところがこのお地藏さんは、どういうわけか知りませんが、白い物が大きらいなのだそうです。白いのぼりを奉納したり、白いシャツを着てお参りしたりすると、腹痛をおこしたり、けがをしたりするなど、必ずよくないことが起こつた、といひます。



ある時白い服を着た馬子まごが、白い馬に、白い綿を積んで、お堂の前を通りかかつたところ、馬も馬子も腹痛をおこして苦しみました。馬子は腹を立てて、

「人を救う仏が、人を苦しめるとは何事だ。」

といつて、お地藏さんを後ろ向きにすえかえましたところ、馬も馬子もつてのけたように、腹痛がなりました。それでお地藏さんはそのままにして後ろから拝んでいるのだそうです。

また庭先におなご竹（め竹）のやぶがありますが、この竹を一本でも伐ると、これも腹痛を起こすので、「けちな仏様だ。」と、かけ口をさく人もあつたそうです。

来見坂の人はあまり不便なので、今は里の方へみんな移転し、木屋の浦のわずかに残つた人々で、お祭りしているといふことです。ここの仏様はどんな気持ちで、世の中の移り変わりを見ていることでしょうか。



⑩ 榎山のお薬師さん  
中村の榎山は東榎山と、西榎山の二つの在所に分かれていて、両方にお薬師さんのお堂があります。

西榎山のお薬師さん

西榎山のお薬師さんは「女のお薬師さん」だそうです。乳の出ない母親がお願いするとその日から、よく乳が出るようになるといわれるほど、ありがたい仏様なので、むかしは乳を授かるために、神山や木屋平の方からも、お参りに来る人が絶えなかったそうです。

乳のない赤ちゃんは「かんの虫」という病気になる、栄養不良でやせ細って、夜も昼もビイビイ泣いて、粗末な食事や、はげしい労働で疲れきった母親を、こまらせたものです。だから乳のないおかあさんには、乳を授けてくれるこのお薬師さんは、ほんとうにありがたい仏様だったのでしよう。



東榎山のお薬師さん

東榎山の東の端にある薬師堂のお薬師さんは、「男のお薬師さん」だそうです。

むかしこの薬師堂は火事で全焼しました。在所の人々がかけ付けた時、本尊さんはひとりてにお堂から飛び出して、前の広場の石の上に立っていました。右腕に大やけどをしていたそうです。今でもその石の上へは、おとなはもちろん、子どもももつたいないといつて一切上らないそうです。その後お堂は再建されましたが、その話を聞いて、美郷村内はもちろん、神山や木屋平からお参りに来る人が、蟻の行列のように、けわしい山道いっぱいに続いていましたそうです。

お堂には正徳六年（一七一六）をはじめ、五枚の棟札がありますが、火事はきつと三百年ほど前の、正徳のころだったのでしよう。それ以来東榎山には一度も火事は起こったことがなく、「お薬師さんが守ってくれるからだ。」といっているそうです。

⑪ 燧が窪のお地藏さん

燧峠ひうちょうげは美郷村の西南の端はにあって、むかしは木屋平村への出入り口でした。海拔九〇〇メートルの高い所なので、北側の中村の東条から越えるにしても、南の二戸から登るにしても、手を立てたようなけわしい坂道を登り下りしなければなりません。頂上にはお地藏さんをお祭りした地藏堂がみつみな、このお堂で一休みしたり、旅人やおへんどはんが泊ることもありました。夏は剣山詣りの人々を相手に、茶店もあったそうです。

むかし、讃岐から来た旅人が、この峠でとつぷり日がくれて、道もわからなくなり、折からの寒さで、とほうにくれてしまいました。日ごろ信仰するお地藏さんをお願いして、ふと足もとにある石を拾って、カチ、カチと打ち合わせると、ピカッ、ピカッと火花が出ました。それでその火花を、集めた枯草に移して、枯れ枝をくべると、勢いよく火がもえ出して、無事一夜を明かしました。よく朝、あたりをよく見ると、そのあたりには燧石ひうちいしが一ぱいありました。

燧石というのは固い石で、石と鉄、石と石を打ち合わせると火花が出て、

それを「ほくち」という綿のような物に移して、火の種をえるのです。明治の初めに日本でもマッチが製造されるようになるまでは、何千年もの長い間火を起こす大切な道具でしたが、火打石はどこにでもあるというものでなく値段の高いものでした。旅人はよく朝、下の東条へ下りて、火打石やお地藏さんのことを話したので、村の人もたいそうよるこんで、峠に地藏堂を建て、「燧が窪のお地藏はん」といって、ていねいにお祭りしました。

ところが、どうしたことでしょう、このお地藏さんは時々化けて出て、旅人をおどしたので、気の強い旅人に棒でなぐられて、首を落とされました。新しく作った地藏さんも、首を落とされたので、三番目の地藏さんは、大岩に彫り付けたので、それからは化けて出られなくなりました。



⑫ 西宗の経塚

種野の西宗の上に平らな所があつて、そこからは種野・川俣・別枝・桁山まで、見渡すことができます。その平地のまん中に、横三メートル、縦一メートル、高さ一メートルほどの土を盛った所があつて、その上が二段になつた塚があります。そしてむかしから、

「お寺がのうなる時が来る。その時のために大切なお経が埋めてあるから、さわつたら罰ばちが当たる。」

といういい伝えがあります。地形や塚の形などからこれは「経塚きやうづか」にまちがいないでしょう。

美郷村内にはこの外に、次の所にも経塚があります。

当地野の源内寺跡

穴地の重願寺跡の上

宗田の肥前の守さんの西方

中枝小学校の上の美奴みぬ間神社境内 ここからは大正五年に、お経を入れた銅製の筒が出て、今は東京国立博物館に保存されています。



お釈迦さんが亡くなつて二千年たつと、末法まっぽうという時代になります。日本では平安時代の中ごろにあたります。それからはお寺も仏像もお経もなくなつてしまつて、世の中は乱れに乱れて、盗人や人殺しが朝晩のようになり、戦争も絶え間なく続き、その上、地震・洪水・日照りなどの天災や、悪い病氣も流行します。こんな時代が長く続きますが、やがて弥勒菩薩みらくぼさつが人々を救うために、この世に現れます。その時人々を救うために、お釈迦さんの説いたお経がないとこまるので、法華経を川原の小石に一字ずつ書いて埋めたり、銅板や瓦にお経を彫つたりして、よく目につく所に埋めたのが「経塚」なのです。村内の経塚はいつ、だれが埋めたのか、何の記録もいい伝えもありません。

### 3 石の伝説

#### ① 中村の山姥岩

中村の小学校の上の山の頂上に、「山姥岩<sup>やまんばいわ</sup>」というところはない大岩があった。南の二戸の在所を目の下にのぞむように立っていました。大岩の南向きには大きなほら穴があつて、冬ぬくい年にはここで山姥が子育てをしていたので、その洞穴を「山姥のふところ」とも呼んでいました。この大岩はおいしいことに、昭和二十一年十二月二十一日の南海大地震で、上の方が折れて二戸の方へ転げ落ちました。

ところでみなさんは山姥の話を聞いたことがありますか。ずうつとずつと大むかしには、日本各地の人里はなれた山奥の岩屋に、山姥が住んでいたという話が、残っています。

山姥はさるのような姿をした大女で、せいの高さは二メートルほどもあり体中毛でおおわれていて、頭の髪の毛は茶色か白髪<sup>しろが</sup>で、それが腰までのびて

いて、洗ったり櫛<sup>くし</sup>ですいたりしたこともなく、かざらで結んでいたといいますが。目は青色のどんぐり目で、口は格別大きく、鹿やうさぎや猿を引き裂いて、その生肉をうまそうに食べているのを見た人もあるそうです。人に害は加えません、それでも怒らすと、ゴリラのように強い力で、なぐり殺されて食べてしまわれるそうです。

「今年の冬はぬくいけん、山姥が子育てするぞ。」と人々がいうように、冬ぬくい年には山姥が、一度に三、四人もの子を生んで育てます。石の上で火をたいて、親子であたっているのを、見た人もあるといえます。しかし人目にふれることはめつたにありませんが、雪の降る日に猪を追つて、山深く入った猟師が、二メートルほどの間隔で、歩いた足跡を見たという話も方々にあります。また大雪の日、家の近くへ来て、外にある小便つぼの小便を、みんな飲んでしまうことがあるそうです、それは山には塩けがないので、小便の塩を好んで飲むのだ、といえます。

中村のある所といいますが、多分この山姥岩の近くの話でしょう。在所か

ら離れた一軒家に、山姥が時々遊びに来ていたそうです。

雨がふる日など、山姥が竹串を持っていろりのふちにやってきて、「頭のしらみをとれ。」というので、もじやもじやした白髪頭をわけて見ると、頭の上にはごみや土や、木の葉などがたまっていて、くもやむかたなどが、ぞろぞろはいまわっています。焼鳥のように串にさしてやると、いろりの火であぶって、むしやむしやとうまそうに食べます。雪が降り続いて寒い時など、ヒョッコリやってきて、だまっというりのふちに坐って、火にあたって帰りません。腹がへっているだろうと、お芋や菜っ葉に塩をもぶってやると、とてもおいしそうに食べるので、塩のかたまりを、おちよくに一杯ほどやると、とてもよろこんで、二、三日たつと、いのししや鹿の片足を引きちぎって持ってきて、だまっっておいて帰ったりしました。

ある年の秋、ひよっこり山姥がやってきて、

「今年の冬は大雪じゃけん、剣山の向こうのぬくい所へいく。それでこれやるわ。ふたとつたらいかんぞ。」  
と、山楮やまかじの皮を紡つむいだ太布たふの糸の入った小さな箱を置いて、帰っていい

きました。その糸を引き出して機はたを織ると、後から後から糸が出て、一反織ってもまだ出ます。二反織っても三反織ってもまだまだ出ます。一と月織ってもなくなりません。二た月織っても三月織っても、なくなりません。半年ほどたつたある日、「ふたはあけるな。」といわれていたが、あまりふしぎなので、箱のふたを取って見ると、最後の糸の端が穴から出ようとすする所で、もう糸はおしまいで、後は一センチメートルも出なんだ、ということです。

ある大雪の降り続いた年の暮、山姥岩の下の在所では、にぎやかな餅つきが始まっています。暖かそうなおくどさんの火、もうもうと立ち上がるせいろのゆげ、勇ましい掛声とともにつき上がるお餅。集った子どもたちは、もらったお餅をほうばりながら、にぎやかに庭中とびまわっています。

そんな平和な様子を、家の少し上の岩に腰かけて、じっと見下ろしている山姥を、子どもの一人が見つけて、おとなに告げたので、今まで平和であった村は大騒動になりました。ゆげの上がるせいろも、つきかけの餅もほったらかして、子どもを家の中へかくして、めいめい棒ぼうや鎌や斧をもって、山姥

の襲撃にそなえました。山姥は時々子どもをさらって、岩屋へ連れ帰るくせがあるからです。そしておとなたちは、猪撃用の火縄銃に弾をこめて、物かげから山姥をねらい撃ちしました。弾は見事命中して、山姥は血を流しながら岩屋へにげ帰って、その後どこへ行ったかわからなくなったので、村の人々もほっと安心しました。

それから一年たって、また節季の餅つきせつきの時期が来ました。白いお餅がつき上がるころ、白の中から赤い血が出て、見る見るうちに白いお餅が真っ赤になりました。人々はふるい上がって、餅つきを取り止めて、年が明けてから餅つきをすると、無事に搗き上がりしました。こんなことが、よく年も、またそのよく年も続いたので、村では「これは山姥のたたりだ。」といって、その後節季せつきの餅搗きは止めて、年が明けてから餅を搗くことにしました。こうした習慣が十年も二十年も、百年も続きました。

明治になって、「文明開化の世の中に、そんなばかなことがあるか。」といって、節季に餅を搗いたところ、やはり赤い血が出たので、この在所では今でも節季に餅は搗かないそうです。

## ② 人継ぎの岩屋

別枝の倉羅くららの谷の向こうに大きな岩屋があつて、在所の人はこの岩屋を「人継ぎひとつぎの岩屋」と呼んでいます。

ずうつとずうつと大むかし、天から火の雨が降りました。火の雨は七日七夜降り続いて、地上の生き物はみな死に絶えてしまいました。そのときこの岩屋いわやでるすばんすばんをしていた小さな男の子と女の子は、岩屋の奥深くかくれていて、岩の間に落ちる水をのんで、生きのびることができたのだそうです。

それから十年も二十年もたつうちに、だんだん子どもがふえて、その子がまたふえて、今のよう人間が大勢になりました。それでこの岩屋を「人継ぎの岩屋」というようになったのだそうです。

倉羅の人継ぎの岩屋





旗の窪の呼び石 右手山中にある

④ 旗の窪の呼び石

郵便や電話などの通信設備のなかった江戸時代には、藩やお庄屋さんからの通知は、「歩」という村役人がいて、家々をまわって知らせました。

桁山村はけわしい山を、川田川がりの字のように取りまいて流れている、交通の不便な貧しい村でした。古い記録を見ると、耕地二十町、その内、田

は一町（一町は一ヘクター）。その生産高は六十四石しかない、ごく小さな村なので、「歩」はおけなかつたのでしよう。それで用のある時は、旗の窪の在所の上に、南に突き出た大石の上から、南下の西の峰の部落に向って、大声で用件をいがって（叫んで）伝え、小竹や不二山部落へ順々に知らせてもらいました。それでこの大石を「旗の窪の呼び石」というのだそうです。

③ 小谷の子ざれ石

種野の小谷の県道わきに、西のたんぼに向って、高さ三メートルほどの大きな石が立っています。これが「子ざれ石」で、下の田んぼにはいつも水がわき出ていました。

大むかし天から火の雨が何日も降り続いて、地上の生き物はみんな焼け死にましたが、石のかげに隠れていた女の人だけは助かりました。悲しんだ女の人自分も死ぬのうと思つて、石の上から飛び下りると、男の子が生まれ、また飛び下りると、女の子が生まれました。石の下に残つた稲も、しだいにふえて、今のように人もふえ、お米もたくさん取れるようになったのだそうです。

またこの石の下の土を持って帰って、水持ちの悪い田んぼにまくと、ふしぎに、水持ちがよくなるというので、方々からもりに来たそうです。



小谷の子ざれ石

⑤ 権現さんの矢石

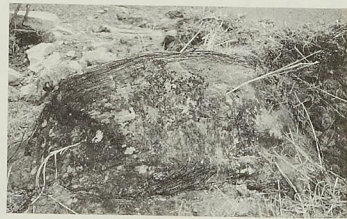
種野小学校の西の黒郷くろごの権現ごんげんさんは、姫竜命ひめたつのみこと・彦竜命ひこたつのみことという雨の神様で、奥野々山の大笹・竜王神社の神様の弟だそうです。神社の森の後の川田川は、むかしは深い深いドン淵で、そこには大蛇が住んでいて、人々に害を加えました。その後近くで鎌や斧を研ぐ人が多くなり、大蛇はその金気をきらって、よそへ行ったといわれています。そして淵も埋まって今では小さな水たまりになっています。大正のころ五メートルほどの大きな蛇に出会って十日も寝こんだ人もあったそうです。

神社の鳥居の前には「影向石ようこうせき」といって、神様がお降りくだになる、大きな石があります。

むかし桁山けたやまの武田権頭ごんのかみという大将が狩に来て、だいじやがこの石を七巻半巻いて、大いびきで昼寝をしているのを見て、射殺そうとしました。家来たちは「あれは神様だから。」と止めましたが、権頭は「人々に害をするものは、たとえ神様でも捨ておけん。」と、強い弓を引きしぼって、大蛇に射かけて見事命中させました。大蛇はのた打ちまわって、後ろの淵へにげこんだの

で、権頭や家来が近寄って見ると、矢は見事に石まで射抜いていました。

今でもこの大石には、矢が射抜いたという直径二センチメートル、長さ一メートルほどの穴が、まっすぐに通っていて、針金を通すことができます。平成六年、このあたりを公園にするため、この石を底から掘り起こして保存することにしました。



権現さんの矢石

⑥ 祇園さんのお休み石

中村の樫平の手に熊の坂というけわしい坂道があります。この坂を登りきった旧道に、およそ一メートル四方の平らな石があります。これが「祇園さんのお休み石」で、この石の上にあがったり、腰をかけたりますと、にわか

に腹がくわる（痛くなる）のだそうです。むかし樫平の板川という家の先祖が、「村中に災難が起らんように、特に悪



い病気がはやらんように。」と願って、京都の八坂神社（祇園さん）の分霊を頂いて、それを背負って帰り、中村が見えるこの熊の坂までもどつて、ヤレヤレと思つて、この平らな石の上に御神体を下ろして一休みしました。それからこの石の上には、村の人だけでなく、剣山参りの人たちもいい継いで、上らなくなったそうです。



村に帰った板川さんは、村の人と相談して、川岸の

清流のほとりに社を建てて、八坂神社としてお祭りしました。それから、悪い病気もはやらず、村には平和な日が続いたそうです。ところが、大正の初め政府の命令で、各村の神社を合併することになりました。ところが地区の人々の何人もの夢枕に神様が現れて「よそへ移るのはいやじゃ、この川のそばがええ。」とお告げがあったので、お太夫さんに相談しました。祇園さんの祭神は素戔嗚尊すさのおのみことという気の荒い神様なので、お大夫さんはみそぎをして、くじて合社するかしないかを決めることにし、地区



山の神さんのお休み石

⑦ 山の神さんのお休み石

種野小学校の西の黒郷に山の神さんの森があります。その裏の川ぶちに、縦・横・高さともに二メートル余りの、ちょうどお豆腐と同じ形の青石があります。この石の上に上ると、腹痛をおこすので、だれも上がりません。それは、山の神様はこの石がお好きで、時々この大石の上に坐つて、目の前の長測ながぶらという、長さ五百メートル余りもある長い測や、さかなの泳ぐ姿を見て楽しまれる

の人が立ち合つて、「合社する」「合社しない」と書いた紙を丸めて、お盆にのせて、てい重に挿さんで、笏しやくを持っておじぎをしたところ、紙つぶてが一つ笏に吸いつきました。おどろいて開けて見ると、「合社しない」という方でした。それで神様のお心だからということ、今も元の所でていねいにお祭りしています。

「神様の座」なので、もし人が上って汚したり、神様の楽しみをじゃましたりするともったいないので、「腹が痛くなる」といって、上るのをいませめたのだ、という人もあります。

⑧ 嵯峨天皇腰掛けの石

別枝の田平から対岸の下浦へ行く旧道ぞいに、たて、横、高さともに一メートル余り、上の面もおよそ一メートル四方の、形のよい石があつて、「嵯峨天皇の腰掛けの石」といわれています。急な坂道を登り下りする老人も子どもも、この石の上へは一切上ったり、腰掛けて休んだりはしませんでした。それはむかしむかし、嵯峨天皇が剣山へ参拝の途中、この石に腰をおろしてお休みになつたので、もったいないからだそうです。またここから手を立てたような坂の上の、蔭城の殿様がこの坂を登り



嵯峨天皇のお休み石

下りする時、この石に腰を掛けて休んだからだともいいます。この石に上ると、急に腹がくわる（痛くなる）のだそうです。今は道路工事のため、道端にコンクリートの台を作つて、その上にのせて、大切にしています。

⑨ 天狗の碁打ち石

東山の湯下の川下の「院の馬場」は、今は県道が通じて昼も夜も車がひっきりなしに通りますが、むかしは人家もなく、細い道があるだけの、さびしい所でした。

その県道わきの桑畑に、高さが三メートル、上の面は縦が二メートル、横一、二メートルの形のよい石があつて、村の人は「天狗の碁打石」と呼んで、「この上に上ると腹が痛くなる。」といつて、恐ろしがつてだれも上りません。西の方にそびえるお高越さんの天狗が飛んできて、ここで碁を打つて楽しみ、川向こうの上に柱のように立つた大石の上に、大天狗が坐つて酒を飲みながら、顔をまっ赤にして、小天狗たちの勝負を見ていたといひます。

## 4 妖怪伝説

### ① 喜市さんの鉄砲

喜市さんは江戸時代の終わりごろ、鬼が城で産れて、後には川又に住んでいました。明治の初め全国に小学校ができた時、種野小学校は喜市さんの家で始まりました。

喜市さんは当時としては学問もあり、浄瑠璃じょうるりはプロなみであったそうて、色々の話が残っています。また鉄砲を持って、山を歩くのが好きだったようです。

ところで、種野峠の近くの赤岩山の洞穴に、赤岩将監あかいわしやうげんという古い狸が、一族を連れてすんでいました。ある時この将監狸が、川又の少々お人好しの人にとりついていうことには、

「わしは阿波狸の番附では張出横綱さんぼうで、屋島のはげ狸とは友達じゃ。あの阿波の狸合戦には、小松島の金長の参謀さんぼう役も勤めたけん、何じゃこわいものはな

いけんど、喜市っあんの鉄砲だけはおとろしいわ。ほかの人の鉄砲は火薬のにおいがしたら、ちよっと片っ方へよったら当たらんが、喜市っあんの鉄砲はどこへ飛んでくるやらわからんけん、よけようがないわ。」  
といったそうです。喜市っあんの鉄砲は、あんまりじょうずではなかったんでしよう。

### ② 宗田の森のトンマ狸

宗田に近い在所のあるお森に、ちよっと間の抜けた狸が住んでいました。

その在所に文蔵はんという肝玉のすわった六十近い人がありました。春から秋はもっぱら畑仕事、そして秋から冬にかけては、山仕事をして暮していました。

ある日の夕方「つるべ落とし」という秋の夕陽が、お高越さんの南へ入って、くらくらなりかけたので、仕事を



トンマ狸の棲み家 肥前寺さんの森

しまつて帰りかけました。家も近くなつて、ふと見ると、道端にさらの芋いもふりかごが転がっていました。以前からおばあさんに「お芋を入れる芋ふりかごの底に穴があいたけん、一ちよさらを買つておくれ。」といわれていたのですがこんな山道にさらの芋ふりかごとはおかしいと思つた文蔵さんは、「ハハーンとんま狸だな。」といつて、拾いあげるように少し腰をかがめて、いきなりそのかごを力一ばいけとばしました。芋はサッカーボールのように道の下へとんでいきました。「ど狸めがわしをなぶりくさつて。」といつて、さつさと帰りました。

二、三日して夕方同じ所を帰っていると、こんどは道ばたの平らな石の上に、おいしそうな塩さばが置いてありました。むかしはこのあたりでは、塩いわしでも、塩さばでも、とびきりのごちそうで、盆と正月とお祭りぐらいか口に入りません。文蔵さんは「おどれ、また出たな。」と思つて、拾い上げるふりをして、さばの尾をつかんで「この飯盗人かしなすめが。」といつて、道端のけやきの大木めがけて投げつけました。飯盗人かしなすというのは、おかすがうまいのでご飯をよけい食べる、それでそういうのだそうです。

何日かたつてこのトンマ狸が、在所の少々人のよい人にとり付いて、その人がしゃべることには、

「あの文蔵はんぐらい仕末の悪い人間はありやへんわ。おばあが芋ふりかごがいてるといよいよつたけん、芋に化けたらよろこんで持つていぬと思うたら、ボールのようにけとばすし、さかになに化けりや飯盗人かしなすいうて投げとばされてすんでのこと殺されるところじゃつた。ほんまに文蔵はんぐらいおとろしいやつはありやあへん。」といったそうです。

## (2) 樫平の大木だおし

樫平の在所のほぼまん中に、大きな大きな杉の木があります。地面すれすれから太い枝がのびていて、幹の太さは目通りで五メートル余り、高さはおよそ二十六メートルもある大木で、村の天然記念物にもなっています。

雨の降りそうな晩などこの大杉の下の細道を通ると、クワーン、クワーンとチヨウナ(斧)でこの木を伐る音がして、バラバラと木くずが頭の上にと

んできます。つづいてシャッキ、シャッキとのこぎりの音がして、「そら、かやるぞ。はようのいとれよ。」という声とともに、メリメリ、ズシンと地ひびきを立てて、大杉が頭の上へ倒れてきます。在所の人は「また狸めがやつとる。」と思うが、知らない人はほんとうだと思って、色まっさおにして、近くの家へかけこみます。あくる朝、見ると何のことはない、大杉はいつもの通り高々とそびえています。ここには大木倒しといういたずら狸がいて、木を伐るまねをして人をだますのだそうです。

### ③ 奥のごはんの大蛇

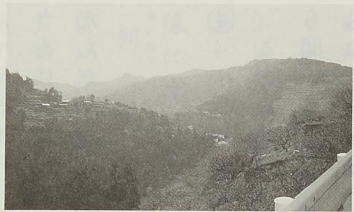
奥野々山は海拔一六四メートル、美郷村では一ばん西で、一ばん高い山です。この山へはポロポロ滝の下や、つつじ公園からも登ることができます。山頂には大笹・竜王の両神社が一つのお宮に祭られています。川田川はこの山から流れ出るので、雨の神様を祭ったのでしよう。旧桁山村全体が氏子で「奥のごはん」といって尊び、氏子以外の人や女子がお参りすると、「天狗や

大蛇におどされる。」とあって、恐れられていました。

むかし高越山に登った山伏さんがこの山の話聞いて、修行のためといって一人で山に登って、拝殿で一休みして、「この山はいうほどのことはない。四、五日ここにこもろうと思うたが、このぶんなら一晩も泊ればよからう。」と独り言をいって、お山を軽しめました。ところが、しばらくすると屋根でミシ、ミシという音がします。こわいことにはなれている山伏も少々気にな

って、庭に出てみると、斗桶とおけほどもある大蛇が、拝殿から庭の大木に打ちわたして、鎌首を立てて山伏をにらんでいました。さすがの山伏も肝きまをつぶして、笈おいするも錫杖しやくじょうもほったらかして、転ぶように山をかけ下りて、とんでにげたそうです。

奥野々山一帯は広い県有林で、杉や桧の大木が山一面に生え茂っていて、山の手入れや材木の伐り出しに山へ入る人も大勢いますが、時々大きな蛇を見かけるそうです。また大蛇騒動そうどうでさわがれた剪宇峠きりうとうげは穴吹川をはさ



奥野々山の遠望 中央左の尖った山

んで隣りあっているの、「あるいは大蛇がおるのかもわからんし、お高越さんに近い山なので、天狗さんじゃって、おるやらわからんぞ。」という人もだんだんあります。

#### ④ 小竹の夜行さん

この話は今、生きていたら百才ぐらいの人が、「子どもの時、おばあさんから聞いた。」といって、次のような話をしてくれました。夜行さんに出会った人の名前は分かりませんが、かりに小竹の松蔵さんとしておきましょう。

用があつて川田へ出かけた松蔵さんは、話が長引いて、桁山の宮んたおの峠へ登りついたのは、夜も大分ふけてからでした。八幡さんの拝殿で一休みして帰りかけると、山の中から大きな白い犬が出てきて、後になり先になりしながらついてきます。松蔵さんは、これは話に聞いた「送り狼」かもしれないと思ひながら、こわごわ暗い山道を帰りました。送り狼は夜道を通る人の後をつけて、いきなりとびかかつて、人間を食い殺すのです。西の峰の

在所もすぎて、小竹が近くなった時、急に犬が松蔵さんの裾をくわえて、山の中へ引っぱりこみます。ただならぬ気配に、松蔵さんはもう食われると覚悟をきめていると、小竹の方からジャンゴ、ジャンゴと馬の鈴の音が聞こえて、やがて白い装束（着物）をつけて首切れ馬に乗った、侍の団のジャンゴはんがかけて抜けていきました。

松蔵さんはきもをつぶしながらも、きまうは大の月の晦で夜行さんの出る自だったと気がつきました。

夜行さんは戦死した侍たちの幽霊で、大の晦の夜ふけに、白い着物を着て首切れ馬に乗り、ジャンゴ、ジャンゴと馬の鈴をひびかせながら、南の山から一直線に讃岐まで駆け抜けていき、あくる日の小の月の朔の夜、同じ道を帰ってきます。道で出会ったものは、みな殺されてしまうのだそうです。

やっと落ちついた松蔵さんは、家まで送ってくれた犬に向つて、「おかげで命拾いをしました。今夜はにわ



夜行さんの道 右の白い道

かのことで何もありませんが、あすの晩おこわを蒸しておきますけん、どうぞ眷属（仲間）様を連れておこしなして。」というど、犬はうなずいてやみの中に消えていきました。山犬さんはおこわが大の好物なのだそうです。

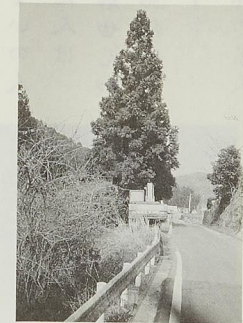
よく日、松蔵さんはおこわを一斗（十五キログラム）ほど蒸して、宮んたおの八幡様にお供えして、お礼を申し上げ、たくさんのはんぼうに盛ったおこわを、庭先へ出しておきました。よく朝起きて見ると、おこわは一粒も残っていないで、犬の足跡が庭一面に残っていたそうです。

「大の晦と小の朔の晩には、夜行さんが来るけん、おとなも子どもも、決して外へ出たらいかん。」と、おばあさんが話の後で教えてくれました。

### ⑤ 古森の大木倒し

東山の上谷の東のはずれに「古森」という所があります。この森にはずつとむかし、神様が祭られていたそうですが、ずいぶん古いことなので、どんな神様であったか、どうなったかはわかりませんが、大水に流されて下流

の恵美子に流れつき、今も上谷地区の氏神様である、暮石八幡神社であろう、という人もあります。そしてお森だけはずつと後まで残っていたので、村の人々は今でも「古森」と呼んでいるそうです。



古森の大木倒し

県道が通じていなかったころは、上流の大野

・丸山・棚谷などの部落の人は、このお森のあたりから大木の生い茂る谷沿いの細道を、行き来していました。ところが夜ふけにこのあたりを通ると、道の上の古森から、カーン、カーンと杉の大木に斧を打ちこむ音がしたかと思うと、木くずらしい物が頭の上にはらばらと落ちてきて、次にシャッキ、シャッキと鋸の音がして、「さら、大杉がかやる（倒れる）ぞ。はよのいとれよ。」という声が聞こえて、バリバリバリ、ドシンと大木のたおれる音がします。しばらくして、落ち着いてよく見ると、何のことはない、大木はもとのままに、夜空にそびえています。人々は「古森の大木倒し」という狸のいたずらと知っていながら、つい化かされてしまうのだそうです。

⑥ 赤しゃがま

市野々の地藏堂の近くの国道沿いの杉林の中に、大きな岩の裂けめがあつて、水がシヨボシヨボ落ちています。夜などここを通ると、何となく気味の悪い所で、「赤しゃがま」という化け物が出る、といわれています。

赤しゃがまというのは「赭熊」のことで、熊の毛を赤く染めて、獅子舞の頭の毛のようにしたものです。

夜ここを通っていると、赤くて長い髪をふり乱した化け物が、いきなり目の前に現れて、ニタツと笑って抱きついたり、後ろから肩をたたくのでふり返ると、顔の上に長い毛が、おおいかぶさります。これでたいいていのは、腰を抜かしてしまえますが、肝玉のすわった人は、「おいおいお地藏はんよ、この化け物を早よ退治せんかい。」

といったり、「おまいは狸じゃろう。わしは虎という鉄砲うちの名人



赤しゃがまの出るといいう市野々の崖

じや。一発八畳敷か腹づつみに撃ちこんじゃるか。」と高飛車に出ると、すうっと消えてしまふそうです。

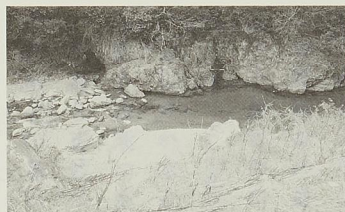
この化け物は、気の弱いおく病者の前によく現れて、びっくりさせたり、こわがらしてはよろこぶが、化け物自身も気の弱い、いたずら好きの豆狸だということなのです。

⑦ 水車小屋の化け物

川俣と市野々の間は、むかしは家は一軒もなく、その上ちようとまん中あたりに深い淵がありました。むかし近藤という人が淵のしも手を堰き止めて、下流へ水をひいたので、淵は一そう深くなり、人々はこの淵を「近藤の堰」というようになりました。淵には青坊主の伝説があつて、夜などこのあたりを通るのは、みなこわがりました。

この淵はいつも青々と水をたたえて、底の方からはちようと温泉のように水がわき上がって、さかなもたくさん泳いでいますが、ここは青坊主の伝説





洪水で埋った近藤の堰

の外、三〇センチメートルもある赤いさかなが底の方から出てくるといって、水泳や魚釣りをする人は、ほとんどありませんでした。

むかしある人がこの淵の岸に上流から水を引いて、水車をまわして、米や麦の賃搗きをして、その糠や小米でたくさん鶏を飼っていました。ザブ、ザブ、ザブとゆっくりに廻る水車、ギー、コトーン、ギー、コトーンとゆっくりに臼を搗く杵の音、糠をかぶったくもの巣だらけの白場は、昼はともかく、夜中の見廻りは、子どもあがりの

小僧には、とてもこわくていやな勤めでした。そんなある夜ふけ、白場を見廻っていた小僧が、ふと淵の方を見ると、淵のまん中あたりに青白い火が、ポーンともったと思うと、だんだん水車小屋の方に近づき、やがて、一休さんそっくりの小坊主が小僧の前に現れて、「おい相撲とらんか。」といって、ふるえ上って声も出ない小僧に組みつき、ものすごい力で小僧を、ずでんと投げとばしました。よく朝主人に起こされるまで、小僧は気を失っていた

ました。主人は、「こわいこわいと思いきよるけん、こわい夢でも見たんじやろう。」といって、その夜は主人が白場を見廻ったが、別に変ったことは、ありません。ところが次の夜、小僧の当番になると、また小坊主が出て投げとばされます。初めは主人も「夜なかの見廻りがこわいけん、あんな作り話でさばろう（なまけよう）」としよる。」と思っていたが、二、三度もおなじことが重なるので、そつと白場の陰にかくれて見ていると、やはり青坊主が現れて小僧を投げとばして、ニタニタと笑いながら淵の方へ帰っていきました。そしてそのよく朝、鶏小屋へえさをやりに行ってみると、なんと、たくさんいた鶏が一羽残らず首を切られて、棚の上に一列に並べられていました。これを見て主人もふるえあがって、早々に営業を止めてしまいました。

水車小屋の石垣は、つい最近まで雑草の中にそのまま残っていました。今は国道の下に埋まってしまいました。また昭和二十年ごろ、この地方は度々台風に襲われて、山崩れや洪水のために、堰もほら穴のあたりを残して埋まってしまって浅瀬になり、青白い光を水面にうつして乱れ飛ぶ、ほたるの名所になり、大勢の人が見物におとずれます。

⑧ ぼり涸のオンギヤア狸

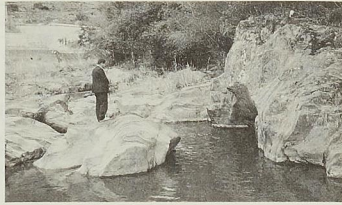
天狗の碁打ち石のある湯下の院の馬場は、兩岸の崖がけと崖の間を、東山川が深く侵食して、そこに深い涸を造っています。

ぼり（子守り）涸もその一つで、大きなおくどさんのような形をした中に、水が流れ落ちて渦うずを巻いています。むかし子守り奉公に来ていた十才ぐらいの女の子が、主人にひどく叱られたので、赤ちゃんを背負ったまま、この涸へとびこんで死んだために「ぼり涸」というのだそうです。このあたりは県道ができるまでは、一面の竹やぶの中に細い道があるだけで、昼でもうす暗く、気味の悪い所でした。その上ここには、オンギヤア狸という狸がいて、赤ちゃんの泣き声をして、通行人をだましたそうです。

手拭をボリさん冠りにして、着ている着物の模様が夜目にもはっきり見える女の子が、そばへ走ってきて、

「ボンヤン（坊ちゃん）が涸に落ちこんで、まいこんみよる（溺おぼれよる）けん早よ助けて。」

といます。涸の中からは小さい子どもの、オギヤア、オギヤアという泣き



院の馬場のボリ涸

声が、やみを通して聞こえるので、「早よう助けてやらにや。」と着物を着たまま淵にとびこむと、たった今まで泣いていた赤子の泣き声も、子守りの姿も、かき消すようになくなります。そこではじめて狸に化かされたことに気がついて、やつのこととて岸にはい上がって、ずぶぬれのまま、近くの家へかけこんで、助けを求めます。こんなことが度々あるので、ほとんどの村人は、この狸のいたずらを知っているのですが、ついつい化かされるのだそうです。

今は崖くずれ防止のため、県道の上も下もコンクリートで固めたので、狸のすみ家もなくなり、自動車も夜も昼も通るので、いたずら狸はどこかへ行ってしまったのでしよう。今ではオンギヤア狸に化かされた話は聞かれなくなりました。

(2) 火事のまねをするオンギヤア狸

オンギヤア狸にはこんな話もあります。

ある時、川俣の相当気の強い人が、急用ができて夜道を、およそ二キロメートルも東の院の馬場まで来ました。何だかざわざわするような気がして、ふり返ってみると、今来た川俣の方の空が、まっ赤な炎ほのおに包まれて、パチパチと物の焼ける音や半鐘はんしょうの響き、人々のさわぐ声が、手にとるように聞こえます。

「これは大変だ、川俣が火事じゃ、うちも焼けよるやらわからん。」

と思つて、川浴いの細道や、用水の土手を、息せき切つて走つて、川俣まで帰つてみると、店にはまだあかあかと灯がともつていて、人影もあり、何の変つたことありません。そこでやつと院の馬場の狸に化かされたことに気がついたのであります。

(3) 高入道に化けるオンギヤア狸

院の馬場の狸については、まだこの外にこんな話もあります。

ある夜、馬車ばしゃひ挽きさんが車に少々の荷物を積んで、院の馬場まで来ると、

急に馬が止まって動かなくなりました。いくら叱しかつても、叩たたいても耳をそばだてて、物におびえた様子で動こうとしません。むかしから、「馬には魔物の姿が見える」といいますが、馬の異状な様子を見て、馬子も急にこわくなり、前を見上げると、馬車の前に、道端のカヤの大木ほどの高入道が、こわい顔をしてこちらをにらんでいます。馬子は無我夢中で息せき切つて、店へかけ込んで、とぎれとぎれに出来ごとを話すと、店の主人は肝玉のすわった人で、したから、さつそく提灯ちようちんをつけて現場へ来て、大声で般若心経はんにゃしんきやうを三回ほど唱えると、馬はとことと歩き出し、店までたどり着いたそうです。

⑨ ドウドの淵の怪

別枝谷は右に左にと、山あいを縫うように北に流れて、宮倉の八幡様の裏でけわしい崖に突き当たります。また宮倉谷は東の雁股山かりまたの権現からおから流れ出て、けわしい山と山の間を西に向つてかけ下り、宮倉の八幡様の北で「ドウドの淵」という深い淵へ、ドウドウと音を立てて落ちこみます。そして

二つの谷が合流して、西の蛇<sup>じょう</sup>淵に流れこみます。

蛇淵の兩岸は七、八十メートルもの高い青石が、ちょうど門のようにそびえていて、ここにもドウドの淵にも、大蛇が棲<sup>す</sup>んでいるとあって、人々に恐れられていました。

この二つの淵の間は、わずか五百メートルほどかありませんが、屏<sup>びようぶ</sup>風を立てたような崖に、せまい道路が通じていて、その道はヘヤビンのような急カーブの連続でした。このカーブから、下の谷底へ落ちて死ぬ人が、大勢ありました。

そして事故のあった夜は、きまってドウドウの淵から大勢の笑い声や、婚礼の夜のように伊勢節のドンチャンさわぎが、夜明けまで続きます。付近の家々では、

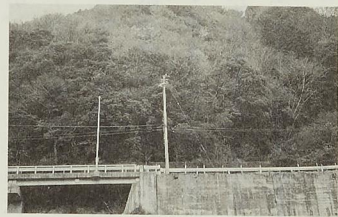
「まただれぞ落ちて死んだにちがいない。」

とこわごわ話しあい、夜が明けるのを待つて行ってみると、顔見知りの人が血を流して死んでいるので、村中大騒動になります。

こんなことがくり返されるので人々は、

「これはきつと淵の主が、通行人を谷底へひっぱりこんで、よろこぶのにちがいない。」

とあって、お不動さんを刻んで、淵の上にお祭りして、坊さんに拝んでもらいました。それから事故もなくなりました。その後台風で淵も埋まり、崖にはガードレールの付いたまっすぐな広い国道が通じたので、淵からの伊勢節は聞かれなくなりました。



ドウドの淵

⑩ 池の窪のヒヒザル

中村の西条の在所のずっと上に「池の窪」という広い平地があります。今は一面のかや原ですが、むかしは大きな池があり、大木が茂って、恐ろしい所だったそうです。

いつのころか、ここに年とったヒヒザルが棲<sup>す</sup>んでいて村の方へ下りてきては畑を荒らしたり、屋根のかやを抜いたり、飯をぬすんだり、しまいには人



間にまで害を加えるようになりました。村の人が大ぜいで鉄砲を持って山狩りをして、木の上をにげまわり、鉄砲のたまを弾き返してよせ付けないのでホトホトこまっていました。

このことをどこで聞いたのか、ある時土佐の国の獵師が来て、山の中に小屋を作つて、ヒヒを追いかけてきました。十日ほどたったある日、ぼったり獵師とヒヒが出合いました。獵師は鉄砲を打ちかけましたが、ヒヒは体に松やにや泥を塗り付けているので、ちようどよろいを着たようで、鉄砲の弾をはずし返します。獵師が最後の玉を打ちつくしたと見るや、ヒヒは猛然と獵師に襲いかかりました。親念した獵師はここへ来る前、高越寺の隠元さんからもらった「許しの弾」を思い出し、この弾をヒヒに打ちかけました。「許しの弾」というのは、神様や仏様の魂のこもった弾で、「どんな相手でも必ずたおす」という、威光のある弾ですが、一生のうちでただ一度、それも命が危ない時だけに使つて、その後は獵は一切止めねばなりません。

彈は見事ヒヒザルに命中し、ヒヒは悲鳴をあげて山をかけ下り、対岸の崖をかけ登つて、山王さんのほころの後ろの穴へにげこみました。猿は山王さんのお使いなのです。後を追つて獵師も洞穴を奥へ奥へ、どこまでも進みましました。やがて向こうが明るくなって外へ出てみると、そこは土佐の自分の家の上の崖でした。家へ帰つてみると、家では獵師がヒヒ猿に食われたと風のたよりに聞いて、三年の法事をしてるところだった、ということでした。

⑪ のた待ち

むかし中村で聞いた話ですが、猪撃ちの獵師が、「今夜向こうの山のさこ（谷）へのた待ちにいつてくる。」

といつて出かけました。猪がダニなどの虫を落とすために、夜になって田んぼのような泥沼で、ころげまわつて遊ぶのを、待ちうけてねらい撃ちするのが「のた待ち」ですが、獵師が獵に出かける時は、一切「のた待ちに行く」といってはならない忌み言葉なのです。こういつて出かけると、必ずよくない

ことが起こる、といわれています。それなのに「のた待ちに行く」といつて出かけた獵師は、日が暮れたので岩かげでたき火をしながら、持ってきた餅を焼いて食べ、猪の来るのを待っていました。そこへ体中毛だらけの、恐ろしい顔をした山姥やまんばが来て、火のふちにすわって、勝手に餅を取って食べはじめました。獵師は「餅がのうなったら、次はわしが食われる。」と思って、そばにあった白い石を焚火たきびで赤くなるほど焼いて、木の枝にはさんで、「そら、やろ。」といつて、山姥の口元へ突き出しました。山姥がそれをバクリと口に入れるのと同時に、谷中にひびきわたるような大声で、「痛いわ、痛いわ。助けてくれ。」と叫びながら、下の方へ消えていきました。獵師は恐ろしいので火をどどん焚たいて夜を明かし、朝になって谷へ下りて見ましたが、山姥の姿はありませんでした。

「夜獵に出る時は、『のた待ちに行く』とはいわれん。そういうて出かけたなら、ろくなことがない。」

と、美郷村の猪撃ちによく何人もの人から、聞かされました。獵師は猿を「きむら」、蛇を「ながむし」といいます。このようにいつてはならない言葉、い

い替える言葉の両方を「山言葉」というんだそうです。

## ⑫ 樫平の高入道

樫平の川向こうの山すその旗間はたまというところに、大きな洞穴ほらあなが三つ並んでいます。一番上の大きな洞穴は広さ十平方メートル、少し下って三平方メートル。一番下は〇、五平方メートルほどありますが、だれが見ても自然にできたとは思えない、ふしぎな洞穴で太むかし、高入道がこの穴を掘って住んでいたと、いわれています。

洞穴から五〇メートルほど隔てた川向こうの、別枝谷沿いに樫平の観音堂があつて、むかしはまわってきたおへんどはんが、よくここで泊りました。ところが時たま夫婦者のおへんどはんが泊ると、さまって夜中に洞穴から、毛むくじやらの太い腕が、スルスルと川越しにのび



てきて、二人の顔といわず頭といわずなでまわるので、おへんどはんはびつくり仰天、肝をつぶして近所の家へ、助けを求めてにげこむのだそうです。樫平の人は「あの高入道は大けなやきもちやきにちがいない。」と話し合っていたそうです。

⑬ 六部峠の高入道

東山鉾山が盛んであったころは、北の六部峠を越えて、馬の背で鉾石を川島へ運び出し、川島からは坑夫の日用品を運び上げました。時には急病で医者を迎えに行ったり、鉾山の急ぎの用で、夜中に峠を越えなければならぬこともありすが、この使はだれもがいやがりました。というのは、この六部峠には、高入道がでるからです。

向こうから白い着物を着た人が近づいて来るな、と思うと、急に手足が動かなくなり、やがてそばへ来た高入道が、見る見るうちに五メートルも十メートルもになり、そばの松の木よりも大きくなって、大箕を二つ合わせたよ

うな大きな口をあけて、牙のあるまっ赤な口からわれがねのような大声で、「かんじやろうかあ。」といます。

たいていの人は肝をつぶし、腰を抜かし、気絶して、朝まで死んだ人のようになります。朝になって峠を越す人にゆり起こされてハッと我にかえりま

す。気の強い人は高入道をにらみ返して、「おお、高入道、だいぶん大きくなったのう。ほんだけんど、わしはおまいを見越したぞ、そらお前の頭の向こうで、お高越さんの隠元さんが、『高入道ええかげんにせんか。』ちゅうてお経を唱えよるわ。みてみいだ。」

というど、高入道は「これはわしより大けな人間じゃなあ。」と思つて、急にバツと消えるそうです。

美郷村内には六部峠の外に、東山の上谷と大野との間の道路や、古土地の「おそげのたお」、院の馬場、別枝の平のしもてのお不動さんを祭つてあるあたりにも、よく高入道が出たそうです。そんな時には気を落ちつけて、眉毛につばをつけるか、腰からたばこ入れを出して、一服吸うて、高入道の足もとめがけて、プーと吹きつけると、たいていクスン、クスンといつて煙にむ

せて消えてしまうので、豆狸のいたずらじゃといわれていました。

⑭ 名刀天狗丸の由来

東山の後藤田家は、代々お庄屋さんだったので、古庄ふるしょうといえます。古庄には「天狗丸てんぐまる」という名刀が伝えられています。

何代か前のお庄屋さんが、藩の用事で夜遅く馬に乗って、川島の下女の辻を通っていると、急に物すごい羽音がして、天狗がお庄屋さんの笠をつかんで、空中へ持ち上げようとしました。肝玉のすわった庄屋さんは腰の刀を抜く手も見せず、天狗の腕をバツサリ切り落とし、持って帰って箱に入れてしまっておき、その刀も「天狗丸」と名付けて、大切に保管していました。それから雨のふる暗い晩など、天狗が羽音をたてて屋根の上を飛びまわって「羽根を返せ、羽根返せ。」と、一晚中わめくのでとても



後藤田家の邸跡

こわかったそうです。

この天狗丸は後になって、家の裏のほこらにしまっておきましたが、ほこらが古くなったので修繕することになりました。その時大工さんが忌タブのあるのに、仕事をしたところ、火の気など金くないはずなのに、火事になってほこらは焼けてしまい、刀もいたんだということです。

⑮ 宮んたおの八幡さんと天狗の松

桁山から高越山へ行く峰伝いの道を一キロメートルほど行くと、「宮んたお」という所があります。「たお」というのは峠ということ、川田から中村へ越える峠道です。

この峠には大変古い八幡様があつて、川田の八幡さんも、平の八幡さんも、ここから分かれていったそうです。それで宮んたおというのだそうです。





お宮のそばにからかさを広げたような、形のよい大きな松があつて、かさの下は五アールほどありました。このかさ松は、お高越つあんの天狗が来て、かつこうよくからかさの形に作ったのだそうです。惜しいことに前の戦争で伐りたおされて、船の材料になつたそうです。

#### ⑩ 天狗の腰掛石

湯下の院の馬場の天狗の碁打石の川向こうに、椎の大木の林があつて、そこに縦横ともにおよそ二メートル、高さは二十メートル余りもある、ま四角な白い石が立っていて、その上に同じ石が折れて、だれかが載せたように、ちようど丁字形にかぶさっています。これが「院の馬場の天狗石」です。村の人はま四角形で白い石なので「お豆腐石」ともいっています。前には県道からよく見えたのですが、今は木の枝にかくれて、見る事ができません。こんなしろいま四角な石は、このあたりにはどこにもありませんし、どうして崖の上に、しかも折れた石が、ちようどま上に載っているのでしょうか。台

風や大地震になぜ崩れないのでしょうか。ふしぎだらけの石です。

むかし村の若い衆が五、六人で、長い竹竿をもつて、上に載つた笠石を、突き落としたんだそうです。そしたらその晩、大ぜいの若者らしい声で「ヨイシヨ、ヨイシヨ」という掛声が、村中に響き渡りました。あくる朝こわごわ村の人々が行ってみると、あたりの草は踏み荒らされていて、きのう落した笠石はちゃんと元のとおおり、柱石の上に載っていたので、みんなは「天狗さんが大ぜいやつてきて、あの笠石を持ち上げて、もとのようにすえたのにながいない。」と話しあい、それからあまり近づかないことになっているそうです。

#### ⑪ 巨人の足跡

高入道は大きいといつても、せいぜい五メートルから十メートルぐらいですが、大人のせいはいはけたちがいで、四、五百メートル以上もあつて、紀伊水道を一またぎして阿波の国へ来たとか、朝鮮の山に太い縄をかけて、日本へ引

き寄せたり、何百俵もの塩を棒で担いで、山の峰から峰へまたいで、塩のない山村の人に配ったりする、人間にとっては、よい人だそうです。

海部郡から山の峰を伝って、神山の高根の山へ来て、さらに足をのばして、中村の上の土俵が窪に右足をかけ左足でつつじ公園の船窪をふまえて、岩津の淵の水を三口半に飲み干したそうです。その時、股の間の玉でこすった所が、中村の西条の池の窪だそうです。木屋平村の伝説では、そのあと山の頂をふまえながら、剣山から伊予の石鎚山の方へ行きましたが、歩いた後はどこもみな十アールほどの凹地になっていそうです。

また川俣の墓はか平たいらへ流れ出る毛無谷けなしだにの斧ちやうなぶち淵おおびとは、大人の子ともが、岩の上につつ立って、小便をした時小便で掘れた淵で、今は砂防ダムで埋まっていますが、むかしは底知れずの深い淵で、淵の上の兩岸には、小便の時ふん張ったという、大人おおびとの足跡が今でも残っています。

## 5 戦争の伝説

### ① 城が丸城の戦

ずっとずっとむかしのことですが、日本は吉野の天皇方と、京都の天皇方に分かれて、永い間戦争が続ききました。そのとき美郷の村内でも、戦争がくり返されました。城が丸城の戦争の話もそのころのことだそうです。

種野のお稻荷さんの北側の谷一つ隔てた、小高い丘の上に、城が丸城というお城があつて、多分南朝方が守っていたのでしよう。城の西には種野谷が流れ、東から南には日開谷ひがいたにという深い谷がとり巻き、東の山の上が本丸で、そこには石垣の跡が今も残っています。また城の登り口には空堀からほりといって、水のない堀の跡もあります。

ある時種野峠に近い宮田の城から、北朝方の兵士が急に攻め寄せてきまし



種野のおかじから城が丸城を望む



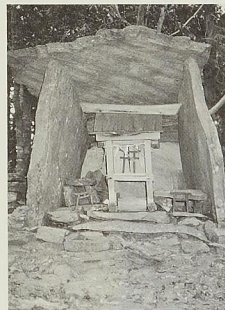
斧淵の巨人の足跡

た。不意をつかれて、城が丸城も本丸も攻め落とされ、城兵は方々へにげてしまいました。勝ちほこった寄せ手の兵士は、意気揚々と引き上げて、本丸の下の日開谷まで引揚げてきたところ、突然伏兵が現れて、矢を射かけたり、斬りかかったので、不意をつかれた寄せ手の兵士どもは、大負けをして全部が討ち死し、大将も首を取られてしまいました。そのあたりを村の人は今でも「取り首」と呼んでいます。

② 武田権頭と宗田肥前守

むかしむかし、別枝谷の深い谷をへだてて、西の方の桁山には武田権頭、東の宗田には宗田肥前守という、強い大将がいました。どちらも大勢の家来を引きつけてにらみ合い、争いが絶えませんでした。

どちらがいい出したかわかりませんが、大将



肥前守の墓という  
おかまご

どうしが決戦をして、強い弱いをきめることになりました。

東の肥前守さんは、そばの竹やぶから青竹を一本引きぬいて、さつとしごいて紐のようにして、たすきにかけて、弓を持って西の方をにらみました。これを見た権頭は、そばにあった大きなけやきの皮を片手でバリバリと剥ぎ取ってふんどしにして、相手をにらみ返しました。そして互いに大声で名乗りをあげてから、弓を満月のようにキリリと引きしぼって、同時にヒョウと放しました。両方から飛んで来た矢は、まん中あたりでカチンと衝突して、二本とも別枝谷へ落ちていきました。これを見ていた両方の兵士たちは、手をたたいたり、小おどりして、二人の武勇をほめたたえました。

下へ落ちた矢は川ぶちにつきささって芽をふき、いつの間にか大きな藪になりました。今でも「矢竹の藪」といって、節の低いまっすぐな矢竹が生えています。



武田権頭の館跡

③ お貴霊さん

別枝の蔭の城主、川村小四郎さんの先祖は、鎮守府將軍依藤太藤原の秀郷ひでさとで近江の琵琶湖の東にそびえる三上山を、七巻半も巻いていた大むかでを、遠く離れた瀬田の唐橋の上から、たった一矢で射殺したという、弓の名人でした。

その血を受けたからでしょう。小四郎も弓の名人でした。いつも城の庭先から北の方、谷を隔てた一キロメートルも先の井頭いがしらに的をおいて、弓の稽古けいこをしていたそうです。今から凡そ六百年ばかりも前の南北朝のころ、小四郎はまっ先に南朝方に味方して、北朝方と戦いました。そして下の谷の堂のあたりから攻めてくる敵の大將をめぐがけて、強い弓を引きしぼってひようと放し、たった一矢で射殺しました。村の人々は大將の射殺されたそばにあった大石に、「貴霊きりやうけん 妙塔みょうとう」と彫って、お墓として弔いました。貴霊というのは「英霊」とおなじ意味で、その霊を尊んだ呼び方です。そして毎年お盆には、精霊踊りをして、その霊を慰めました。



お貴霊さん

それから六百年余りたった今でも、川村一族の者は決してここへはお参りしません。もしお参りすると、腹がくわって（痛くなつて）なかなかおらんそうです。

④ 長宗我部に焼かれた庄野寺

古土地の馬淵の南に、庄野寺という大きなお寺がありました。今から四百年余り前の戦国時代に、土佐の長宗我部の兵士に焼打ちされたということです。

阿波へ攻めこんだ土佐の兵士は、吉野川に沿って東の勝瑞に向かいましたが、途中のお寺やお宮など大きな建物はもちろん、百姓の家まで焼き払って進んだので、南から帰ってきたつばめは、家がないので、木の枝に巣をかけたといわれています。

土佐の兵士は夜ふけに庄野寺の北側の馬淵にかかっていた橋を渡って、急に攻めこんで寺に火を掛け、あわてふため坊さんたちを、片っぱしから打

ち取って引き上げました。その後お寺は再建されず、一町（一ヘクタール）余りの敷地は田んぼになってしまいました。そしてその片隅に、片側が焼け焦げた柿の大木がありますが、それはその時焼けたものだそうです。

また馬淵にかけた橋は、どんなにがんばろうにしても、すぐ流されてしまうので、橋をかけるのをやめたそうです。

そしてその後、大の（月）晦と、小の朔ついでちのま夜中には、寺跡から白い衣を着た坊さんたちが、白い首切れ馬に乗って、ジャンゴ、ジャンゴと鈴を鳴らしながら、橋の上を通るような音をたてて川を越え、土佐兵の後を追うように、通りすぎるので、村の人たちは、「夜行さんが通りよる。」「ジャンゴハ  
ンが出る。」と、いつて、とてもこわがって、外へよう出なんだそうです。

美郷村では庄野寺の外にも、種野のお稻荷さんや、神宮寺・浄連寺・極楽寺などが、長宗我部の兵士に焼かれたという伝説が、今でも残っています。



庄野寺跡の柿の古木

### ⑤ 陣が丸の戦

今から四百年余りも前のことですが、蜂須賀さんが阿波の殿様になって、長い間続いた戦争もやっと治まり、平和のさざしが見えかけました。

しかし山分の豪族たちは、新しい殿様の政治に反対して、方々で小さな戦争をしかけて、蜂須賀さんを手こずらせました。これを「土豪一揆」といって、麻植郡でも木屋平越前守が、川井の梅津左馬丞や鴨島の飯尾八左衛門などとともに、美郷村や木屋平村の兵士を一千人ほども集めて、東山の陣が丸に立てこもって、戦争をはじめました。ちょうど蜂須賀さんは、三好郡の池田の方へ、新しい領地を見廻りに行っていたので、川島の上桜城にかくれていて、殿様の帰り道を襲う計画を立てました。これを知った殿様は急に路を變更して、船で吉野川を下って徳島へ帰り、危ないところを助かりました。

その後、越前寺は蜂須賀軍に攻められて戦死し、他の大将たちも降参したので、兵士たちも散り散りになって、陣が丸の戦争は終わりました。一方神山や祖谷や仁宇谷では、蜂須賀軍は苦戦して大将たちも戦死し、土豪一揆を全部平らげるのには、五年余りもかかったということです。

## 6 地名の伝説

### ① 別枝の地名の由来

ずうつと大むかしのことですが、種野の太郎兵衛さんという大工さんが、平の方で仕事をしてくらくらなつての帰り、山谷の下の水がシヨボシヨボと落ちる所へ来ると、夜なのに模様のはつきり見える着物を着た、美しい娘さんが、道端に立っていて、「私は川又まで行くんじゃけん、狸がこわいけん一しよに連れていってくれへんで。」といました。太郎兵衛さんはいい気になつて「よしよし、わしも川又までいぬけん一緒にいなんかい。」といつて、つれだつて歩いてみると、娘さんが、「道が悪いんで手を引いてだ。」といひました。少々助平の大工さんは、「おやすい御用じゃ。」といつて、手を引いていくと、こんどは「手が痛うなつたけん、こつちの手とかえて。」というので、氣のええ大工さんはニヤニヤしながら右の手と左の手を握りかえて、市野々の元お地蔵さんのあつたしもての、ここも上からしづくがぼちぼち落ち

るところまで来ました。ふと人の話し声があるので氣がつくと、そばの樫の木を枝をしっかりと握りしめていました。太郎兵衛さんはたぬきに化かされて一晩中木の枝を握っていたのです。

たぬきに化かされるのは、「手を握り代替えて」といわれて、握り替えるときに化かされるのだそうです。太郎兵衛さんは一晩中「別の木の枝を握っていたので、それまで、上別司、下別司といっていたのを「別枝」という字を使うようになった、ということですよ。

### ② 湯下の温泉

むかし東山の湯下で、畑の中からとつぜん温泉が噴き出したそうです。何でも東の方の県道ぶちの一段高い桑畑が、湯元だったそうです。

ある日突然畑の隅から、もうもうと白い湯気が噴き出し、熱いお湯がこんこんと噴き出しました。人々は突然のできごとにおどろきましたが、よろこんで在所の名前も湯気と改めました。しかし温泉が体によい事も、観光資源

であることも知らない、大むかしのことですから、見物人に畑をふみ荒らされるわ、お湯で作物が枯れるわしたので、畑の持ち主はおこつて、湯口に牛ぐそを一ぱいおしこんだら、お湯はヒツタリ止まってしまいました。しかしお湯の噴き出たという所と、湯気（湯下）という地名は今も残っています。



湯下の温泉がわいた跡

### ③ 広瀬川と逆瀬川

逆瀬川というのは、種野谷川のことです。忌部氏が阿波に来て、初めて拓いたという種野盆地の水を集めて、村内の川水がみな北に向かって流れるのにこの谷は逆さまに、南へ向かって流れて、川俣で、むかしの広瀬川、今の川田川に注ぎます。それで種野谷川を逆瀬川というのだそうです。旧剣山道路は種野峠から川俣まで約二キロメートルの間に、十三回半もこの谷を右や左

に渡りながら、通ったそうです。

広瀬川は川俣橋の下で、別枝谷と東山川を合わせた広い大きな川なので、こう呼んだのでしよう。明治の末ごろまでは、水量も多く鉋毒もなかったのに、吉野川から、鮎やイダがたくさん上ってきたそうです。

### ④ 恵田名

恵田名は川俣付近一帯の古い地名で、今は種野八幡神社のお祭りの時、「今年の神輿当屋は恵田名」とか、「花廻りは恵田名」、「屋台当屋は恵田名」などと、使われているだけです。

南北朝時代に吉野の朝廷から、木屋平村の松家氏宛に「北朝との戦に手柄があったので、ほうびとして恵田名を与えらる」という文書が残っています。黒郷の山の神様の近くは、



恵田名の板碑と五輪塔

要害のよい土地で守るのに都合がよく、飲み水や水田もあり、風呂ん谷というお城に関係のある谷や、神社や寺跡、多くの板碑や古い五輪塔などもあります。たぶんここに名主の館があったのでしよう。

参考 恵田名関係の松家文書

恵田名可知行之由

依仰執達如件

六月廿九日 阿波守為仲

花押

恵田名知行すべきの由  
仰に依って執達件の如し

六月二十九日 阿波守為仲

(年号なし)

花押  
(サイン)

兵衛尉殿

兵衛尉殿  
(木屋平氏)

⑤ 下別司・上別司・戸山

今ではまったく忘れられた地名もあります。下別司・上別司・戸山・恵田名などもその例でしよう。

下別司は別枝のうちの宗田・繁野・愛後・松尾・生光・柿谷あたりです。上別司はその外の別枝のことで、南北朝のころまでは別の村だったようです。

また戸山は十山のこと、鎌倉時代、今の美郷村と木屋平村を十か村に分け全体を十山と呼んでいたのが、戸山になったのでしよう。里に近い山を外山やまというので、旧種野山村を外山といったのが、戸山の字をあてたのでしよう。昭和の初年までは時々年寄り、戸山という言葉を使っていました。

⑥ 種野山国衙領

南北朝のころの文書に、種野山荘、種野山国衙領こくがりょうの文字が度々見えます。国衙領は「国司が支配する地」という意味で、今の美郷村・木屋平村全体と、山川町のうち川田山を含めた、次の地域です。

戸山(種野山)・気多山(桁山)・川田山・東山・下別司・上別司・中村山  
以上美郷村と山川町の一部

三ッ木山・川井山・大浦山(木屋平) 以上木屋平村



今は種野山といえは、旧三山村の種野山村のことになっていましたが、昭和三十年の町村合併で、美郷村には公式の種野の地名はなくなり、山川町に残っています。



種野山国衙領

⑦ 尼ん平と墓ん平

美郷村役場の少し東に、あま尼ん平とはか墓ん平という所があります。どちらも東山川に沿った広く平らな所です。

尼ん平はいつのころかわかりませんが、しやうき聖忌尼という尼さんが開拓したので、こういうのだそうです。

墓ん平は東山川にそって尼ん平の東の方、毛無谷を隔てた広い平地です。この平地のほぼ中央に、周りが十五メートルほど、高さ約四メートルの円い古墳があったので、こう名付けたのだといえます。この円い古墳は遠いむか

し、このあたりを開拓した人のお墓だといわれていますが、先ごろ土地を造成した時、こわされてしまいました。またその近くの道路ぶちのおかまごの中には凝灰岩で作った古い仏像が三体と、小さな板碑が一基祭られています、このあたりの歴史の古さを物語っています。



墓ん平の仏像

⑧ 鎌倉屋敷

東山の月野の上の方に、「鎌倉屋敷」という所があります。一反（およそ一〇アール）ほどの平地に、家の土台石と思われる石組みや、弓の矢に使う矢竹の藪なども残っていて、鎌倉時代ここに武将の邸やしきがあったといわれています。

ここは中枝村や木屋平村から、神山町・鴨島町・川島町方面へ出る通路に



東山 鎌倉邸跡

あたっているのので、木屋平村の三木氏や松家氏、中枝村の河村氏などの武将が、前衛基地として、ここに兵を置いて守らせたのでしよう。月野には南北朝時代三木氏の武将今鞍氏が住んでいたという邸跡もあります。また、その上方陣が丸は、昭和初年スキー場のあった所で、海抜八七メートルの高い所で、むかしの山頂道路が各地へ通じています。「阿波志」という古い本には、

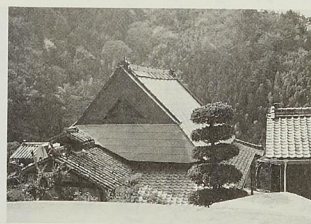
「陣が丸はおよそ五百歩四方、極めて高く名西・板野・阿波・麻植の各郡を見下ろし、遙かに淡路島も見渡す要衝である」と記されています。大むかしから要害の地だったのでしよう。

⑨ 柿谷の鎌倉氏

東山の恵美子から南の方へ、十分ほど坂を登った所が柿谷で、旧中枝村の東の端の静かな部落です。

一時は九戸あった家々はすべて鎌倉姓で、笹りんどうの紋を使っています。先祖は源氏の一族で、平安時代源義家に従って奥州で大功をたてた鎌倉権五郎景政だそうです。戦国時代足利義昭將軍に仕えていた子孫が、阿波に来て川島城主の客分となり、長宗我部軍に破れてここに引きこもり、祖先の霊を祭る「鎌倉大明神」を中心に、このあたりを開拓したそうです。

ここには先祖が奈良から持ってきたという、御所柿ごしよがきという甘柿の原木があつて、渋しぶのない甘い実がたくさんなり、それを領主だった稲田さんに献上しました。そして、稲田さんからお礼に、柿谷という地名をくれたのだそうです。



柿谷部落

⑩ 鎌倉田

今から百八十年ほど前、徳島藩が各村の庄屋から集めて作った郷土誌「阿

波志」には、

「鎌倉田は別枝の勘蔵名かんぞみょうにあり、鎌倉幕府の領地であった」

と記されています。勘蔵地区は中枝小学校の川向こうの高い所にあつて、鎌倉田がどのあたりか、たずねたがわかりませんでした。地形からいって鎌倉幕府の領地というほどの広さの田んぼは、考えられません。あるいは鎌倉時代に開墾した田んぼかも知れませんが、二百年前までは、まだそういう言い伝えがあつたのでしょうか。

⑪ 三十間もある大鯉

殿様の時代には百姓は勝手に、村の外へ出ることはきびしく禁止されていきました。ただ信心のための四国へんろや、お伊勢参りなどは、「旅行手形」という特別の許可証をもらうと、旅行ができました。旅に出ると行く先々で、見るもの聞くものみなめずらしいことばかりです。そして帰ってくると、村の人もそのみやげ話をたのしみに、聞きに来ました。

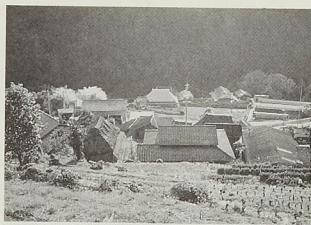
旅の宿では他国の人も打ちとけて、お互いに自分の国のことを話し合ひやがてお国自慢じまんになつて、ついついホラ話も出て、話に花が咲きます。

別枝の人で名前をいうのは遠慮えんりょしますが、とても話じょうずな人がありました。ある時お伊勢参りの宿で、例のお国自慢じまんから、ホラ話になりました。

「わしの国にはなあ、大けな鯉こいがいっぱいおるんでわ。どの在所でも十間や十五間のはふつうで、一ばん大けな鯉は三十間、中の鯉でも二十間はあるんでわ。」と話しました。

話半分といますが、聞いていた人々も、じょうずな話ぶりに、ホンマにして耳をかたむけて、聞き入りました。一間は約二メートルですから、鯨くじらよりも大けな鯉です。

別枝の古井こいの在所は人家は三十軒あまり、中古井なかくいも二十軒ほどの在所なので、それをおもしろく話したのでしよう。



古井の部落

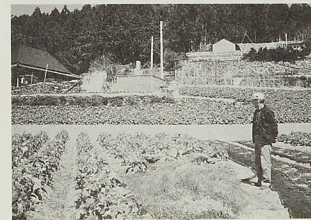
⑫ お月様が下りてきた月野

東山小学校から中ん谷川に沿って、南へ登りつめた在所が月野です。

月野は海拔およそ八〇〇メートルもの高い所で、ここからは阿讃山脈や阿波・麻植・美馬の各郡を見渡すことができて、とても景色のよい所です。在所の中央には山の上ではめずらしく、五、六ヘクタールもの広い傾斜のゆるやかな畑が広がっています。月野という地名については、次のような話が伝えられています。

むかしむかし、ずっと大むかしのことです。そのころ天の上に二つあったお月様のうちの一つが、この景色のよいのがお気に召して、明るい光を放ちながら、在所のまん中へ下りてきました。そのはずみで、今まで山であった所が、ちようどすりばちのように、なだらかな傾斜のある、広い土地に変わりました。

村の人はお月さんが下りてきたことをたいそう喜んで、そこにりっぱなお



月読命神社跡 中央

宮を建てて、月の神様「月読命」をお祭りし、お月様が作ってくれた広い平地を「月野」と改めました。それ以来、村は豊かになり、神様をいねいにお祭りしていましたが、昭和初年、神社は広幡八幡神社に合社され、お宮の跡は「中屋の窪」といって、元の社殿の石が積み重ねられています。

⑬ 上谷・中谷・殿川

東山には大きな谷が三つあって、その流れに沿って、人が住み、田畑がひらけています。むかし田畑を一枚ずつ調べて土地台帳を作った時、村役人が谷川や在所に、次のように名前をつけたのだそうです。

上谷 名西郡の柳の水や一本杉の西から流れ出て、東山川の一番上手（上流）にある谷なので「上谷」とし、この谷に沿った広い在所も上谷ということにしました。

中の谷 上谷と殿川との間にある谷川なので、中の谷と名付けました。この谷は月野の上の鎌倉屋敷あたりから流れ出ています。この谷川に沿った在

所も中の谷といえます。

殿川 木屋の浦の上方陣が丸が源流で、下流の広い所を殿河内、あるいは殿川といえます。「殿」という言葉には、「一番あと」という意味があるので、上谷、中の谷、最後の谷という意味で、殿川というようにしたのでしよう。

これら三つの谷川は古土地で一つになって、六キロメートルほど西の川俣で別枝谷と合流して「広瀬川」

(今の川田川) になり、螢川になり、山崎で吉野川に流れこみました。なお古土地は前は小棚の字を使っていたましたが、自分の住む土地は、「古くから開けたよい所」と自慢して、古土地の字に代えたといわれています。



右 殿川 左 中谷の合流点

#### ⑭ 旗の窪

美郷中学校から上へ上へと、いくつもの部落を通過して、山の稜線ま近くま

で登った谷あいの静かな在所が「旗の窪」です。高い所ですが、冬でも暖かく、ずっとむかしから「久保姓」が五軒だけ住んでいました。

屋島の戦に敗れた数人の平家のさむらいは、やっとここまで落ちのびて、山の上の松ノ木のてっぺんに、たくさんの赤旗を立てて、後れてくる味方への目印にし、追ってくる源氏には、平家が大ぜいいるように見せかけました。それでここを「旗の窪」というのだそうです。後を追ってきた源氏は、はるか前方の山の上に、たくさんの赤旗が風になびくのを見ました。山川町の旗見はそれで名付けたといえます。源氏はここで一休みしてから、攻め上ろうとしましたが、たくさん平家の赤旗や、川田川のV字形の深い峡谷、その先のけわしい山坂を見て、源氏の兵士はここから引き返したそうです。



旗の窪

## 7 人物の伝説

### ① 堂宮大工藤原幾五左衛門

大工の幾右衛門さんは、今から百七、八十年ほど前、東山の恵美子えびすにいた堂宮大工どうみやだいくでした。堂宮大工どうみやだいくというのは、神社やお寺やお堂などを主に建てる特別な技術を持つ大工さんのことです。ことに幾右衛門さんは、彫刻にかけては、四国一といわれていました。

それで蜂須賀の殿様から江戸の上屋敷の建築を命ぜられて、りっぱに仕上げました。殿様はその出来ばえをほめて、「藤原幾五左衛門政光」という苗字みょうじと、脇差を差すことを許され、その外、刀や袴かほしもなどいろいろのごほうびを下さったそうです。今でも上屋敷の部屋毎の欄間らんまの図面や、その時の道具が残っています。その外、讃岐の金比羅さんや、県内のお宮やお寺や藍商人の大きな家などは、たいてい幾五左衛門が建てた、といわれています。

讃岐の金比羅さんの拝殿を建てた時、土地の大工にねたまれて、棟上げの

前の晩、何本かの柱をひき切られました。皆はどなにしようとおわてましたが、幾五左衛門は少しもさわがず、だれにもわからんように継ぎ合わせて、無事、上棟式をすますことができました。この話を聞き伝えて、方々のお宮やお寺の建築をたのまれるようになりました。

昭和の初年、上板町の六番札所安楽寺の、本堂の竜の彫り物が、手をうつと鳴くというので評判になり、新聞にも大きく取り上げられました。調べてみると、幾五左衛門の作であることがわかりました。また市場町の組頭庄屋の大きな母屋を建てた時、一週間も十日も鉋かんなど研ぎばかりして、仕事にかかりません。十一日目にしんぼうしきれなくなってお庄屋さんが、とがめると、「大家の旦那が職人の仕事に口出しするな。そんな家の仕事はごめんだ。」といって、研ぎあげた鉋で板を二板けずって、重ね合わせて庭の池へ投げこんで、さっさと帰りました。後で板を引き上げて、離そうとしましたが、どうしても離れないので、刀の刃をこじ入れてやっ



鎌谷幾五左衛門の拝領の刀と遺品



右上が鬼板の生家

れていた。このように大砲さんは、工夫研究するのが好きで、いろいろ変わったものを作りましたが、ある時、山の中で鷹たかのひなを拾ってきて育てて、その羽を丹念に調べて、グライダーを造って、屋根から飛び下りました。ところがグライダーの羽根が折れて大けがをして、仕事ができなくなったということです。

③ 百六才まで生きた鬼板

明治になる前に、桁山の旗の窪に、鬼板おにいたという人がいました。ほんとうの名前は藤吉郎といって、百六才まで長生きしたそうです。鬼板という恐ろしい名前は実は父親の菊助という人の相撲の「しこ名」でした。菊助さんは力持ちで、体もずば抜けて大きく、草相撲ではこの人に勝つ人はなかったといわれています。ところで鬼板というのは、鬼瓦の代わりに板で作った棟

はがしたということ。また「東山の古庄の母屋の天井板は幾五左衛門が削ったもので、蠅はもすべって、ようとまらん。」といわれるほどの腕前でした。幾五左衛門が腕によりをかけて建てたその家も、だれも住み手がなくなって先ごろ取りこわしてしまいました。しかしまだ方々に「幾五左衛門が建てた」という家が残っていますが、どの家も少しのくुरいもないそうです。

② グライダーを造った大砲さん

江戸時代の終りのころ、東山の中ん谷に「大砲さん」という、すばらしい腕前の大工さんがいました。大砲さんの本当の名前は八十太やそだといって、神山の生まれだそうですが、くわしいことはわかっていません。

大砲さんは特別な技術のいる水車造りの名人で、当時麻植、阿波、名西などの各郡の水車は、ほとんどこの人が作ったといわれています。また太陽の進む方向に、ぐるぐる廻って、一日中日の当たる家を建てて、日当りの悪い山あいの人々を、うらやましがらせ、「飛驒たぐみの工の生まれかわりだ。」といわ

飾りのことです。

藤吉郎さんも父にて体も大きく、力も強かったので、いつのまにか父のしこ名で、呼ばれるようになり、長生きすることができたのでしよう。藤吉郎は相撲はとらなかつたが、「カク撃ち」という射撃大会では、百発百中、この人の右に出る人はないといわれていました。

「カク撃ち」というのは、公認の射撃大会ですが、一種のバクチで、農業のひまな旧三、四月ごろ、山奥の神社やお堂のお祭りに、名西、麻植、美馬などの各地から、腕におぼえのある鉄砲撃ちが集まって、お金をかけて勝負するので、付近の村の人々は総出で見物に行き、露店も出て、娯楽の少ない山村では、たった一つの楽しみでした。競技は次から次へとお祭りを追って、一と月ぐらい、各地で行なわれました。カク撃ちは大正の終わりごろまで行なわれて、今でもその後が残っています。

④ 高はんの豆まき

高蔵はんは今から百年余りも前の人で、美郷中学校の校庭の西北の隅あたりで、おゆきさんというおばあさんと二人で住んでいました。高はんは石やさんで、「高はんの積んだ石垣は絶対にくずれん。」といわれるほど、石積み名人でした。

高はんは色が黒く、せいが高く、がんじょうな体つきの人で、常にはむつつりしていますが、時々おもしろいことをいって人を笑わせました。おゆきさんはその名のように色の白い小柄な美人だったといえます。

高はんは毎年節分の夜は、川俣のどの家よりも先に、下の在所に向かつて大声で「福は内、鬼は外。」といって豆をまきます。これを聞いて川俣中の人も大声で豆まきを始めます。ところがある年例年のように鬼の豆を榊すすきに入れて大声で「福はー外、鬼はー内。福はー外、鬼はー内。」と、大声で豆をまきました。そばからおゆきさんが、「おじいさん、そりゃさかさまじや。」という和高はんは、「福はー外、鬼はー内。へちゃあーこちゃー、へちゃーこちゃー。」と、どくなりました。「へちゃーこちゃー」というのは、「反対じゃ」と



いうことです。これが在所中の評判になりましたが、高はんはそれから毎年「へちやあこちやあ。」といって豆まきをしたそうです。むつつりの高はんもこんなユーモアがあったのでしよう。

(なお同じ「へちやこちや」の話が勝浦郡の福原にもあります)

⑤ 美郷村の豪族たち

美郷村内には鎌倉時代から戦国時代にかけて、次のような豪族がいたことが、記録や伝説に残っていますが、今では全く忘れ去られた人もあるようです。

- |    |        |                  |         |
|----|--------|------------------|---------|
| 月野 | 今鞍進士   | 南北朝の人。           | (三木文書)  |
| 大鹿 | 織田信家   | 織田氏の一族という。邸跡がある。 | (良蔵院文書) |
| 湯下 | 猪井四郎太夫 | 延文の板碑がある。        | (阿波志)   |
| 倉羅 | 倉羅権頭   | 部落上方に祠がある。       | (阿波志)   |
| 古井 | 和泉泉左エ門 | 雁又の壘に拠る。         | (阿波志)   |

- |     |       |                  |        |
|-----|-------|------------------|--------|
| 四ッ松 | 林翁九郎  | 川田城主の一族という。墓がある。 | (阿波志)  |
| 宗田  | 宗田肥前守 |                  | (徳島県史) |
| 日浦  | 浅田出羽守 |                  | (阿波志)  |
| 陰城  | 河村左馬亮 | 南北朝・戦国時代         | (阿波志)  |
| 平   | 明石掃部頭 |                  | (阿波志)  |
| 城戸  | 財田権頭  |                  | (阿波志)  |
| 桁山  | 武田権頭  | 雁又の矢などが残っている。    |        |
| 品野  | 藤野信濃守 | 桁山村庄屋。           |        |
| 種野  | 明石掃部頭 | 宮田壘にいたという。       |        |
| 柿谷  | 鎌倉権頭  | 足利義昭仕えていたという。    |        |

権頭ごんのかみというのは、権大納言。権大僧正などのように、守・頭など正式の役の外に仮りに任命された長官の役のことです。



月野 今鞍屋敷跡

## 8 その他の伝説

### ① 貸し椀伝説

別枝の四ッ松から焼山寺道を少し登ると、道の左側に高さ二十メートル余りの大きな岩壁があつて、その中の洞穴に、弘法大師がお祭りされています。

むかしむかしの話ですが、このあたりの在所で、お客があつて、お膳ぜんやお椀わんがたくさんいる時には、この岩屋の前へ来て、穴の奥に向かつて、

「あした私の家でお客がありますので、どうぞお膳とお椀を何人前お貸しなして。」

と頼んでおくと、あくる日の朝、入り口に、頼んだだけの膳と椀を、ちゃあんとそろえて、出してくれていました。お客がすんだらきれいに洗つて、お礼をいって返しておきますと、また次に入り用な時、貸してくれるので、在所の人はたいへん重宝がって、よろこんでいました。

ところがある時、横着者おうちやくものがいて、お椀を一つこわしたのに、何日もほつ

ておいて、洗いもせず、こわしたことや、お礼の一つもいわずに返しました。それからただれがいくら頼んでも、お膳もお椀もいっさい貸してくれなくなりました。



貸し椀伝説のある  
四ッ松堂の岩屋

## ② 七人塚

別枝の中古井の後ろの山の頂上で、柿谷と東山の未見坂の三つの地区の境に近い焼山寺道沿いに、土を盛った塚があつて、どれも一メートルほどの自然石が七つ並べて建てられていて、七人塚と呼ばれています。

これはむかし東山に北地という武芸の達人がいて、ある年神山町の神社の奉納仕合で争いとなりましたが、温厚な北地さんは早々に引き上げて帰ってきました。納まらない神山のさむらい十人程が、後を追ってきて、このあたりで斬り合いとなりましたが、たちまち七人が斬りふせられました。残った相手は勝ち目がないと見てにげ帰りました。それで、その死がいここ埋めて、石碑を建てて吊ったのが、この七人塚だそうです。



中古井の七人塚

## ③ 馬淵とドウドの淵

東山の古土地のお薬師さんの近くに、馬淵という所があります。今は埋まって浅瀬になっていますが、むかしは底の知れない深い深い淵だったそうです。それでその上に橋をかけて、通行していましたが、ある時せなかに石を積んだ馬が、何に驚いたのか橋の上で急に暴れて、淵の中に落ちました。石をのせていたのでアレアレいううちに底深く沈んでしまいました。馬子



恵美子のドウドの淵

や村の人も大ぜい集まりましたが、淵の底をながめる外、どうにもしようがありません。淵は何事もなかったように、ただ青々と水をたたえて、時々白い泡あわが浮き上がるだけでした。それから十日ほどたつて、川下の恵美須のドウドの淵に、石をせ負った馬の死がいが浮いて来しました。馬淵とドウドの淵は、直線距離では三〇〇メートルもありませんが、その間におそげのたおとという小高い丘があるので、川は南へ向きをかえて、五〇〇メートルほど流れ、大石に当たってまた、北へ流れて、ドウドの淵にドウドウと大きな音

を立てて、流れこんでいます。

「むかしから、馬淵とドウドの淵は底で続いている、というけんどほんまじやなあ。」

と村の人々は話しあいました。それにしても、そんなことがあるのでしようか。

#### ④ お亀淵と手斧淵

種野谷のお亀淵かめぶちと、毛無谷の手斧淵ちゆうなぶちは、どちらも小さな淵ですが、青々と水をたたえた、底の知れない気味の悪い淵で、「底の方で両方が通じ合っている」といわれています。地図の上で線を引いたら、一キロメートルほどですが、歩いて行くのには、高い山をいくつも越えなければなりません。

むかし、お亀淵の上で木こりが木を伐っていて、誤って手斧を淵の中へ落としました。斧は柄を上にして、淵の底深く沈んでしまいました。木こりは淵にもぐって斧を探す勇氣もなく、その日は家に帰りました。それから何日かして、手斧淵のそばを通ると、この間お亀淵に落とした斧が、淵の上に浮いたり沈んだりしていました。急いで取り上げて見ると、やはり自分の斧でした。それで、やはりこの二つの淵は底で通じているのだと、人に話したそうです。

「淵や湖の底が互に通じ合っている」という伝説は、もともとシルクロードを通って伝来したもので、日本でも各地でいわれています。奈良の東大寺二月堂で、三月十三日に行なわれる、お水取りの水は、福井県の遠入川おたじゅうから送られた水を、この若狭井わかさいの井戸で汲みあげて、仏様に供える儀式で、これがすむと、西日本に春が来るといわれています。

おかめ淵



本書の刊行に格別のご協力を頂いた次の方々に深く感謝申し上げます。  
順不同、敬称を省略させていただきます。

表紙並びにさしえ 下 時治郎秀臣

後藤田宇市	猪井喜三治	樫久保一美	栗本善正
矢西保	久保績	新聞明	佐藤辰巳
上野春美	古谷義男	藤村好一	東野健一
飯田正義	北原国雄		

## 編集後記

美郷村教育会会長 横石文夫



美郷村の伝説集が、喜多弘先生のご協力をいただいで  
発行されることになりました。

美郷村の伝説を一つの本にまとめて残そうという話が出たのが、今から四  
年前の四国へき地教育研究大会美郷大会の準備中の事でした。ふるさと美郷  
のよさを知り、美郷を愛する子供を育てるために、美郷の自然・産業・歴史・  
文化を調べる一環として取りかかりました。

初めは、PTAに働きかけ、協力してもらえば簡単にできると思い、計画  
したのですが、いざ取りかかってみると大変で、老人会・婦人会にもご協力を  
お願いしました。

しかし一冊の本にまとめる事は難しく、見通しがたちませんでした。そん

なおり、河野正満種野小学校長のご紹介で、喜多 弘先生の全面的なご協力を得る事ができ、更に上野喜久村長・猪井泰孝教育長・下時治郎秀臣氏のご理解、ご協力を頂き、四年目にしてやっと発刊にこぎつける事ができました。「言うは易し、行方は難し」の言葉とおり、いろいろな方にご無理をお願いして発刊できました事を大変うれしく思い、感謝の心でいっぱいです。美郷村の伝説がこの一冊に収録されたことにより、永久に語りつがれる事と思えます。

核家族化が進み、昔話が子や孫に語られる事が少なくなり、忘れかけている時期だけに、大きな遺産になることと思います。関係者のみなさんに厚くお礼を申し上げます。



著者略歴

喜多 弘

明治45年徳島県麻植郡美郷村に生まれる。

昭和9年徳島県師範学校卒業

昭和45年徳島県麻植郡鴨島町飯尾敷地小学校長退職

徳島県麻植郡川島町教育委員会、徳島県立麻植寮に勤務

徳島県郷土文化会館民俗資料委員、徳島県文化財巡視員

阿波学会監事となり、現在徳島県立文書館資料調査員

著書 中国四国石の民俗徳島編、御用帳一、川島城と林道感

岩倉城と脇城、阿波のかりこ牛、阿波の石敢当

共著 日本城廓大系巻15、日本地名大事典（徳島県）

阿波の氏堂、阿波の木地師、阿波の船、阿波の石造民俗

四国の祝い事、四国の葬制、四国の生業等



美郷の伝説

---

美郷の伝説

---

発行 平成6年7月14日  
著者 喜多 弘  
徳島県麻植郡川島町大字川島421番地  
発行者 美郷村教育委員会

---

